

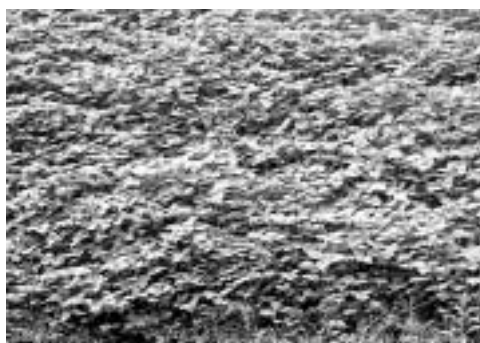
V 阿仁打当地区（鈴木千鶴子さん・鈴木米孝さんの記憶）

鈴木家は1代目松五郎（文化13年3月3日生）・ヤス夫妻、2代目辰五郎（天保4年9月7日生）・ヤエ夫妻、3代目久蔵（安政6年2月2日生）・スエ夫妻、4代目孝之助（明治28年1月7日生）・キン夫妻、5代目松治（大正9年3月7日生）・千鶴子夫妻と続き、現在は米孝（昭和26年1月12日生）・ハツ子夫妻の6代目である。

松治さんがご存命であれば、今回の調査でお話をうかがった方の中では最年長だが、残念ながら平成17年に85歳で亡くなられた。松治さんは昭和40年2月に西根正さん、鈴木辰五郎さん、佐藤傳蔵さんと共にヒマラヤ登山をしておられる。また役場に頼まれて昭和53年から平成4年8月まで「熊牧場」の世話をしていたことがあるそうで、現在はお孫さんが「熊牧場」に勤務し、クマに深い愛情をそそいでおられるとの事である。鈴木家では松治さんが「しかり」を務めていた当時の様子を妻の千鶴子さんからお聞きしたが、それはマタギの世界にいた女性側の生活や気持ちをうかがう機会にもなった。また松治さんは息子に猟の仕方を教える事はなかったそうで、米孝さんは「またぎ（狩猟）」に関する諸々の事を父の仕草を見て覚え、そして失敗して覚えたそうである。鈴木家の聞き取り調査では、マタギを取り巻く妻や子の気持ちを若干ではあるが垣間見る事ができた。

鈴木家には「またぎ用具」の他に生活用具が保管されている。[地機] [おひきがね] [おひきの台] [糸枠と台] [糸撚り車] [藁打ち石] [筵はたし] [すご編み台] [油締め器] 各種の [そり] [ウシ用のくら] 等々。こうした「もの」は使われていた時代の生活背景をおおよそ把握できる品々で、よく残しておいて下さったと嬉しく思った。かつては当たり前存在していた道具や用具がその価値を認識される事なく失われ、気が付いてみると何処にも「もの」がないといった状態になってしまう。「もの」がなくなるといわれる物的証拠がなくなり、すべてが推測の域を出ない不正確な情報に陥る可能性がある。地域に存在しなかつ地域に密着した情報を伴っている物は、どんなに汚くてもまた壊れていたとしても、地域を語る貴重な証言者である。幸い阿仁の地域にはまだ生活用具が残されており、生活を含めた文化をまるごと復元することが可能である。情報の提供者がおられるうちに、地域で更に調査を継続されるよう期待している。

上記の「もの」から色々な生活背景を推測できるが、今回の調査では手をつける事ができなかったのも、うかがったお話から概要を記録するにとどめた。



写真番号 117-1、117-2 鈴木家裏山のカラムシ

1 生活の背景

この辺りでは昔から米や野菜を作る生活に変わりはなく、先祖の代から同じような暮らし方をしていたと思われるとの事である。戦中から昭和30年代までは焼き畑をしていた。カイコを飼っていた記憶はないようだ。千鶴子さんが19歳で結婚した頃はカラムシを植えてそこから繊維を採っていた。アサは植えていなかった。家の後ろの山には今でもカラムシが沢山生えている。カラムシは背丈が高くなるよう

に育てて刈り取り、皮を剥いて束ねたものを「つつみ（堰）」に何日か入れておいた。柔らかくなってから「おひき」でひいて繊維を採ったそうだ。[地機][糸撚車]その他が残っているが、千鶴子さんには機織りの経験はないそうである。機織りをしていたのはキンさん以前の女達という事になる。

米孝さんの記憶では小学生だった頃は炭焼きをしている人がいたそうである。作物はイネ、ソバ、ダイズ、アズキ、野菜類などを自家用として作っており、沢では「やす」を使ってマスを12匹も捕った事があったと千鶴子さんが話しておられた。「またぎ（狩猟）」で得たバンドリやウサギの肉も食料になったし、山の木の実も勿論食料になった。クリは長期保存する場合、天日干しして虫が付かないようにしてから、大型の「けどし」型の袋物に入れて屋根の上にあげた。敢えて雨ざらしにしておいたそうである。そうして保存したものを冬になると煮たり焼いたりして食べた。

「かの（焼き畑）」と畑と田圃

戦中から昭和30年代まで、営林署から雑木山を1町歩から1町歩半集落で借りて焼き畑にした。「かのまき」の所は畑で作った作物の「から」やその他をまとめて焼くので、特別に肥料はいらなかった。最初はソバを蒔いた。家の傍の畑や水苗代には人糞を入れた。人糞は「げす桶」に入れて「荷縄」で背負って運んだ。また「天秤棒」で前後に「げす桶」を下げて1人で運ぶ事もあった。田圃では水が冷たい水口にはヒエを、次に餅米用のイネを、次に普通のイネという植え方をした。イネ、ソバ、ダイズ、アズキ、野菜類などの作物は自家用である。「かのまき」をしていた頃、米孝さんはもっぱら運搬係として働いた事を覚えている。藁製の「背中当て」をつけて刈り取ったソバを生そのまま束ねて運んでくることがあれば、山で乾燥させて脱穀することもあった。脱穀した穀物は「かます」に入れて「背中当て」を着けた上にマダ皮製の「背負い縄」で括りつけて背負った。イネもソバも「はさ」掛けした。「はさ」の柱はクリ材で「棹（横木）」をかける四角い貫通孔がある。「棹」は12尺の長さの真っ直ぐで軽いスギ材を使用した。使わない時はとりはずした。「はさ」は洗濯物を干すのにも使える。「はさ縄」の場合は製作する機械があった。

ウシの子取りと堆肥

ウシは赤べこ（短角牛）を6、7頭飼っていた。ウシを飼う際に雄のウシは共同で飼い、放牧中に種ウシ（雄ウシ）を30頭のうち1頭の割りで放牧しておいた。夏、放牧の間に自然交配で種付けをすると1～3月の間に子ウシが生まれた。その子ウシを秋に阿仁合の市場へ連れて行って競りにかけた。7月に入って間もなく放牧し9月末頃に山からおろした。お盆の時期などに出産しそうなウシがいる場合は家においた。ウシは家に接している「べこまや（小屋）」で飼っていた。ウシがいると堆肥が得られる。藁が腐りやすいように「押し切り」で細かく切って「まや」に敷いておいた。この地域では堆肥のことを「肥え」と呼ぶ。家の傍の畑には人糞も使用したが、田圃には堆肥を入れた。7月の前までにとれた堆肥は「まや」の外に「肥えもり」にしておいた。

野場の事

ウシに食べさせる餌は、夏は田んぼのくろ草を食べさせた。秋はハギやクゾ（クズ）など餌となる牧草を、日にちを決めてみんなで共有地に刈りに行った。その場所を「野場」といい、「野場」の火入れは「野場やき」と言う。そこで共同で刈った草はみんなで平等に分けた。刈った草は山から運ぶが、その時「つなぎ」という縄で結んだ。この縄には平等に草を分ける事ができる工夫があった。縄に一定間隔で目印となる瘤が付けられていて分量が分かるようになっていた。刈り取った生の草は「背中当て」の上に縄で括り付けて背負って運んだ。米孝さんは子供の頃、「野場」で刈り取った草を「リヤカー」で運んだことがあった。その時「つなぎ」という縄の瘤を目安にして草を束ねて結んだ事を覚えている。家の傍で干す時は1本藁で束ねて軒下に立てた。この立てかけた束のことを、米孝さんは「ぼうしをたてる」と言ったように記憶しているとの事だった。自分の家の所有地の草で間に合う場合は「野場」には行かなかった。ウシ6、7頭分の草は二つも三つも運ぶ必要があったが、遠い野場からは一背負いしか背負ってこれないので、千鶴子さんは近くの山から運んだそうだ。乾燥させたものは「つなげてまるって」梁

の上にあげた。「まや」の上の梁は板敷きになっている。「たか梁」といって梁の更に上に梯子が掛かっていて、千鶴子さんはその梯子を登るのが怖かったそうだ。ウシに食べさせる藁は[押し切り]で切って食べさせた。くず米の場合は煮て食べさせた。「にわ」の隅には据え付けた「かまど」があり、そこには大きな[釜]がはめ込まれている。その[釜]で煮た。

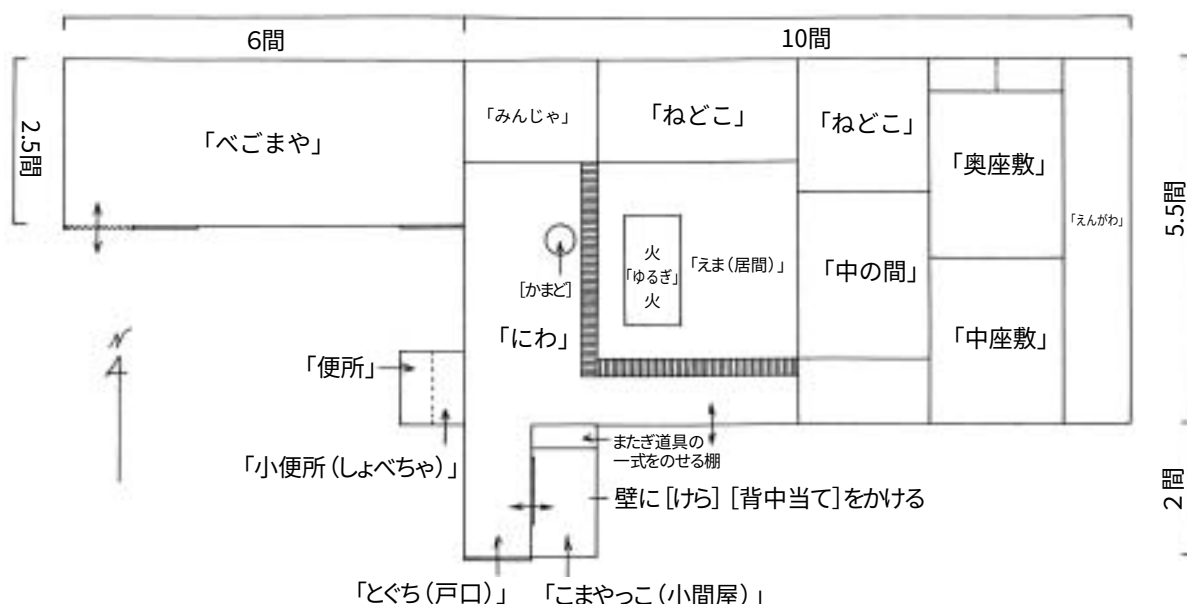
材木の事

薪やナメコのほだ木(ブナ、ナラ、シラカバ、イタヤ)あるいは家を建てる時に使用する屋材は、自分の山から伐ったり、払い下げになった営林署の山の木を伐ったりしていた。木は[ばず]とか[よず]と呼んでいた[そり]で運んだ。[そり]を使ったのは昭和60年代後半頃までで、それからは重機を使用している。現在の家は昔の家をもとに改装したもので、総漆の家である。大工さんが漆で磨き上げるのに3日もかかったそうだ。昔は[じゃく]といって柵屋根の家だった。

米孝さんは「薪とり」の時に1日に何十回も往復した経験がある。薪をとりに行く時などは山まで[そり]を担いで行くので[着皮]を着用した。[着皮]は寒さをしのぐために背中に着けるが、サイズの大きいものは山仕事用、小さいものは「またぎ(狩猟)」用と使い分けていた。

鈴木家(聞き取り調査による概略図)

「じゃく(柵屋根)」の「すご屋」現在はこの家を改装して住んでいる



間取りの図ー2 改装以前の鈴木家、「くず屋根」の「すご屋」、聞き取り調査による概略図。作図者 名久井芳枝

大きな「ゆるぎ(炉)」と生活用具の製作

「ゆるぎ(炉)」はどこの家でも生活の中心であったが、鈴木家の「ゆるぎ(炉)」は畳1畳ほどの大きさに2箇所であき火をしていた。松治さんがウサギを捕って帰ってきた時など、「ゆるぎ(炉)」の前に[ござ]を敷いて「凍みとかし」をしていた。「凍みとかし」とは雪の中を歩き回っていたため、[つまご]の紐が濡れて凍みあがっており、手もかじかんでいて紐を解くことができないので、「ゆるぎ(炉)」の火で体も[つまご]もしばらく暖める事であった。当時着るものは全部手作りだったため、「ゆるぎ(炉)」の傍で女達はいつも針仕事をしていた。男もまた「ゆるぎ(炉)」の傍で黙々と手を動かし、農作業の時に着るマダ皮製の[けら]や[背負い縄]や履き物を作っていた。松治さんもマダ皮製の[けら]や[背負い縄]を作っていたが、[背負い縄]はマダ皮



写真番号 118 藁打ち石(鈴木家)

の繊維にボロ布を混ぜて3本撚りにしたものを手で紬っていた。体にあたる部分のことなどを考えて太くする部分と細くする部分があった。履き物は「またぎ(狩猟)」に出掛ける時に履く「つまご」や畑まで履いていく「草履」、[わらじ]、そして「しべ」という藁製の長靴などを作っていた。外にある「藁打ち石」で藁を打ち、それを「ゆるぎ(炉)」の傍に持ってきて作っていたものだった。電気がない頃は「ランプ」の灯りでやっていた。

ゴム入りの「たちき」の事

マタギが着るものも女が着るものも「やまいしょ」と言っていたそうだが、マタギは主に袖が鉄砲のような形の「てっぽうぼど」を着ていた。尻の部分が割れている「もんぺ」は男物で、中に「ふんどし」を着けた。「はかま」は尻の部分が割れていない。女は尻が割れていない「もんぺ」の仲間である「たちき」を穿いた。「標準もっぺ」というのはゴム入りで、働き着として更に改良され、股の部分の襠が少なくなり前布幅のだぶつきが少なくなっている。見せて頂いた「たちき」にも胴周りにゴムが入っている。昔は前と後ろが分かれていて前後に紐が付いており、その紐を結んで着用したとの事である。だんだんに紐の代わりにゴムを入れるようになったが、そうすることで非常に穿きやすくなった。お姑さんのキンさんがおよめさんである千鶴子さんに言った言葉は趣深い。「便利いふていいなあ。あのひも(ゴム)だば、おしっこすずぎにも。あんねいがったな、すごくはきやすいもんだなあ」つまり「ゴムひもの入った「たちき」はとても便利でいいものだ。おしっこをする時にもしやすいし、あんね(およめさんの事)、とてもいいなあ、すごくはきやすくていいものだなあ」と言って喜んだ言葉である。「もの」は人の知恵や工夫で少しずつ改良されていく。そしてその都度キンさんが感じたようなささやかな幸せをもたらしてくれたに違いないが、その喜びを生声で聞く機会にはなかなか恵まれない。日頃、私は「もの」を図面化するという行為を通して、「もの」の向こう側のかすかな声をとらえたいと格闘している。この行為は必ずなんらかの手応えを私に与えてくれるため、「もの」に対する私の信頼度はとても高い。しかしそれが正しいか否かとなるとその答を得るのは簡単ではない。キンさんの喜びの言葉を聞き、「もの」の向こう側に感じとっていたひとつのささやかな真理を、今回はっきりとした生声で聞き取ったような気がして感動を覚えた。

「蚊よけ」と「火縄」

ちなみに畑では裸足で作業をした。千鶴子さんによれば、夏「蚊よけ」としてフキの葉を足に巻いてから「わらじ」を履いた事があるそうだ。それでも蚊に刺されたため、夏でも「つまご」を履いた。また「蚊よけ」としてニラの葉を擦って肌につけたこともあったという事である。また打当の人は皆、「蚊よけ」のために田畑へ行く時は「火縄」を頭に巻きつけ、それに火を点けて燻した。その「火縄」は「火縄銃」の時に使うものとは別で、マダ皮を剥いで縄にし、それを2回位捻って頭の大きさに合わせたものである。

「たいまつ」の事

千鶴子さんがお嫁にきた頃は「たいまつ」を使用していた。猟に行く時は朝早くて暗いため、「たいまつ」を持ち歩いていた。千鶴子さんが30歳ちょっと過ぎた頃の昭和30年代に、「たいまつ」をかかげて朝早くクマ捕りに出掛けたのを覚えている。その時の衣装はすっかり昔の姿だったが、それ以後はそういう衣装で出掛けた事を覚えていない。「たいまつ」はマダ皮製である。マダ皮を剥いで1mくらいに切って干したものを束にして使用していた。干す時はずらりと沢山干したものである。そうして用意しておいた。

四日市の事

昔は市日が阿仁合の水無(みずなし)で開かれ近在の人が集まった。4日ごとに開催されたため四日市と言われた。食料から道具類まですべてあり、今でいう「スーパー」と同じような役割があった。そこではお金がない人がマメやアズキを持って行って欲しいものと交換した。また毛皮を現金に換える事もあった。昭和10年代まで開催されていた。

2 またぎ（狩猟）

身支度

松治さんの場合、「またぎ（狩猟）」の時に着る衣装や道具の準備はすべて自分で行い、女の人には手をつけさせないものだった。衣類は松治さんの部屋の「行李」に一式保管されていた。その他の道具や用具は、「とぐち（戸口）」の横の「こまやっこ（小間屋）」（物置）にある専用の棚に保管されていた。「またぎ（狩猟）」を終えて帰ったあとの汚れた衣類の洗濯は女がしていた。

米孝さんの時代には肌着の上に「セーター」や「シャツ」を着て「着皮」を着用した。ただし、暖かい時は、肌着の上にすぐ「着皮」を着用したものである。米孝さんは松治さんが「ぼど」を着ていたのを見た事があるが、松治さんの頃も下着は「パンツ」を穿き、その上に洋風の「股引」に「ずぼん」というスタイルになっていた。昔風の格好で「またぎ（狩猟）」に出掛けたのは、昭和30年代までだったようである。履き物は藁製の「つまご」を履いていたが、生ゴム製の「ぼっく靴」が出回ってからは松治さんも米孝さんもその靴を履いた。雪の深い時は、イタヤ材を割って曲げた「わりきゃんずき」を必ず携帯して履いた。昔は足の甲を差し込む部分が牛革でできていたが、牛革は雨に濡れると伸びてしまうので使いにくい。そのため米孝さんは牛革ではなくビニール紐のものを使用していた。昔は「ふろしき」のような四角い布を三角に折って、頭と耳と背中を覆って顎の下で結び、その上に「あまぶた」を被っていたようだが、米孝さんは松治さんが「あまぶた」を被っているのは見た事がないそうだ。「ふろしき」のような四角い布は「あまぶた」を使用しなくなってからも使った。これは松治さんも米孝さんも使用していたという事で、米孝さんにとっては「マフラー」というイメージである。獲物を入れるための「ズック袋」を背負って行ったが、その中にはマフラーや着替えを必ず入れたものである。また雨よけや防寒になるイヌ皮製の「着皮」は「またぎ（狩猟）」の時や山仕事の時に常時着用した。米孝さんによれば、「着皮」は暖かい上に背中と「着皮」の間に隙間ができるため、汗をかかなくていいものだとの事である。「いっぽく」する時に「着皮」を背中からずらして敷き皮にして座った。毛皮の方が雪の面に接する。「いっぽくする」というのは次の段取りの打ち合わせとか、ご飯を食べる時、その辺を眺める時などに使う言葉である。松治さんが使用した銃は年代を追って「村田銃」「元折れ銃」および「ライフル銃」である。米孝さんは「ライフル銃」を使用しているが、子供の頃、松治さんが「葉莢」に火薬を詰めている時など、傍で厚紙の型抜きの手伝いをしていたそうで、「村田銃」や「元折れ銃」についても大変詳しい。

家に帰り着くまで必ず残しておいた一個のおにぎり

松治さんが「またぎ（狩猟）」に出掛ける日は、朝3時頃発つとなれば、千鶴子さんは1時ちょっと過ぎに起きて準備をした。「ゆるぎ（炉）」の上にかかっている「鉄鍋」でご飯を炊き、弁当の用意もした。弁当はしゃけの塩引きを入れた大きめのおにぎり、[けどし]に3個くらい入れて持って行った。[けどし]には1人分の弁当を入れた。風呂敷でただ包むよりはこれの方がご飯がさめにくく保温性があった。松治さんは「家に帰り着くまでに何があってもいいように、必ずおにぎり1個を予備として残しておかなければいけない」と言っていた。いくらおなかがいなくても食べずに、おにぎりを1個残して帰って来たものだった。「がっこ（漬け物）」があればそれも[けどし]に入れたが、弁当の中に味噌に関したものは絶対に入れる事ができなかった。それは味噌漬けという言葉が「みそをつける（失敗する。しくじる）」に通ずるということで、松治さんが嫌ったからである。千鶴子さんにとってマタギの世界はとても「つらかった」そうだ。実家の祖父もマタギだったが、その頃は千鶴子さんも幼くて「味噌をつけようが、塩をつけようが、それがいけないことだなんて分からなかった」。結婚してから、叱られる度に神経をびりびりさせていたそうだ。

千鶴子さんが嫁に来た頃の「またぎ（狩猟）」の弁当は、米の粉で作った「しとぎ」であった。「ゆるぎ」の「あく（灰）」の中に入れて焼きがたがつくまで焼くと、「しとぎ」に「あく（灰）」がつかなくなるので、それを持って行った。また25、6年前にバターを入れて搗いた餅は固くならない事が分かって、弁当の仲間入りをした。また干し餅も持って行った。干し餅というのは、餅を薄く短冊型に切ったもの

を、寒中に外に出しておいて凍らせてから乾燥させたものである。焼いて食べる。

またぎ（狩猟）に発させる時は機嫌よく

千鶴子さんは松治さんが不機嫌になって途中で「またぎ（狩猟）」をやめて帰って来た時の事が忘れられない。それは水苗代の準備をする時期で、「肥え」を運ぶ仕事やいろいろあって忙しい時期だった。余所ではみんなで仕事をしていたが、千鶴子さんはいつも一人で仕事をしていたため、松治さんが「またぎ（狩猟）」に出掛ける時に、つい愚痴めいて「今日も行くのか」と言ってしまった。その時はもう持たせるためのお弁当も作っており、千鶴子さんにとっては愚痴をこぼしても松治さんが出掛ける事は分かっていたが、心に湧き上がる物を押さえきれなかった。松治さんは出掛けた。しかし村のはずれまで行った所で戻ってきた。「なんしてきた（どうして戻ってきた）」と聞いたら、「こんなに気持ちの悪い思いをして行ったら、猟になるもんじゃない」と言って、その後一週間も口を聞かなかったそうだ。そういう心の衝突が事故につながりかねないという事は、千鶴子さんにもよく分かっていたため、「またぎ（狩猟）」に行くとはいえ機嫌よく発させてあげなければならず、それ以後、朝小言を言うことができなくなった。男達の営みが常に死と隣り合わせだという事は女の側にも充分理解できる。それゆえ女の側では、自分の不注意からつまらない結果を招かないようにと、細心の注意を払う必要があり、見えない重圧を抱えてストレスが溜まったであろう事は容易に想像できる。家を守る女達は結構辛かったのではないかと思う。

野宿

結婚前の事だが、一週間も10日も山に野宿したことがあったと松治さんが話してくれたそうだ。そんな時は雪の中で寝入ってしまえば死ぬので、雪の上に柴を敷いて寝たそうである。それは柴の上であれば痛くて寝入ることができないという理由からである。なんとも過酷な話である。

「にわ」に朝まで置かれた3頭のクマ

結婚したばかりの頃は、毎朝大きな「ゆるぎ（炉）」のある「えま（居間）」に二重にも三重にもなるように人が集まり、お酒を飲んだりお茶を飲んだりして「またぎ（狩猟）」へ行く先の相談をしていた。夕方帰ってくると一杯御神酒をあげて、獲物があれば解体していた。松治さんの健在な頃は6、7人のグループがあって、毎日毎日「またぎ（狩猟）」のために歩いていた。十何日歩いて廻ってもクマが捕れないという事もあれば、1日に3頭も4頭も捕ったことがある。そういう時はクマを家まで引っ張ってくるのも大変だった。ある時、家の「にわ」に朝まで3頭のクマを置いていた事があった。千鶴子さんはもし夜中にクマが起きたらどうしようと思ったそうで、とても怖かったと話してくれた。朝になって解体し、みんなで平等に分けて、一杯飲んで解散したそうだ。

猟の時期

松治さんは10月から11月頃の月夜の晩にバンドリ（ムササビ）を捕りに出掛けた。夜の11時か12時頃に出掛けて夜が明けた頃に帰ってきたものだった。7、8羽のバンドリを「ズック袋」に入れて持って帰ってきた事がある。テンやイタチは寒中（2月）に「がばさみ」や「竹筒」で捕る。ヤマドリも冬に捕った。

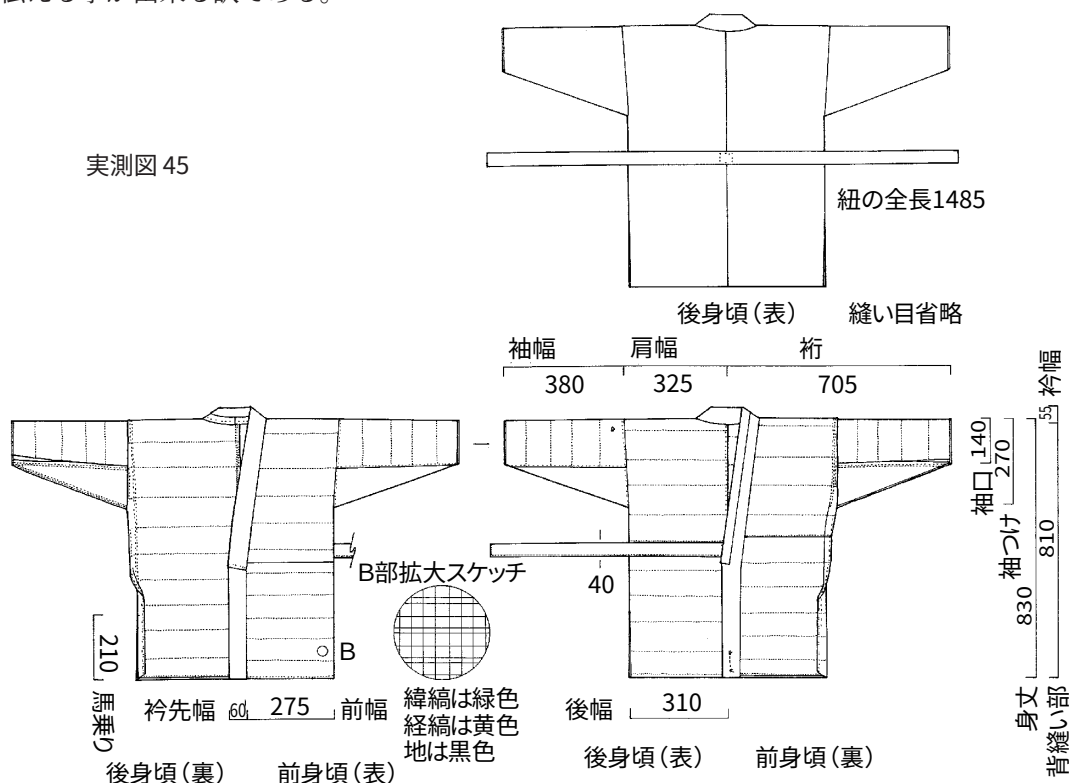
現在は解禁日の11月15日から3月15日までが猟期である。米孝さんは殆ど日帰りでクマしか狙わないそうだ。銃の性能が良くなっているので、1人でクマ撃ちに行く事もある。もっぱら自動銃（連発）を使用しているが、村田銃（単発）を使用する事もあると話しておられた。クマは餌がなくなると早く冬眠する。クマの食べ物はブナの実、ドングリ、ヤマブドウ、コクワ、クリ等でトチはあまり食べないらしい。餌がなくなると里クリを食べに下りてくる。そうすると山に餌が少ないことが分かる。作物の実りは花の咲く頃の天候に左右される。春の有害駆除が4月10日頃から5月の中頃にあり、現在ではその時に駆り出されて猟をする事が多いそうだ。

3 またぎ（狩猟）用具

衣類

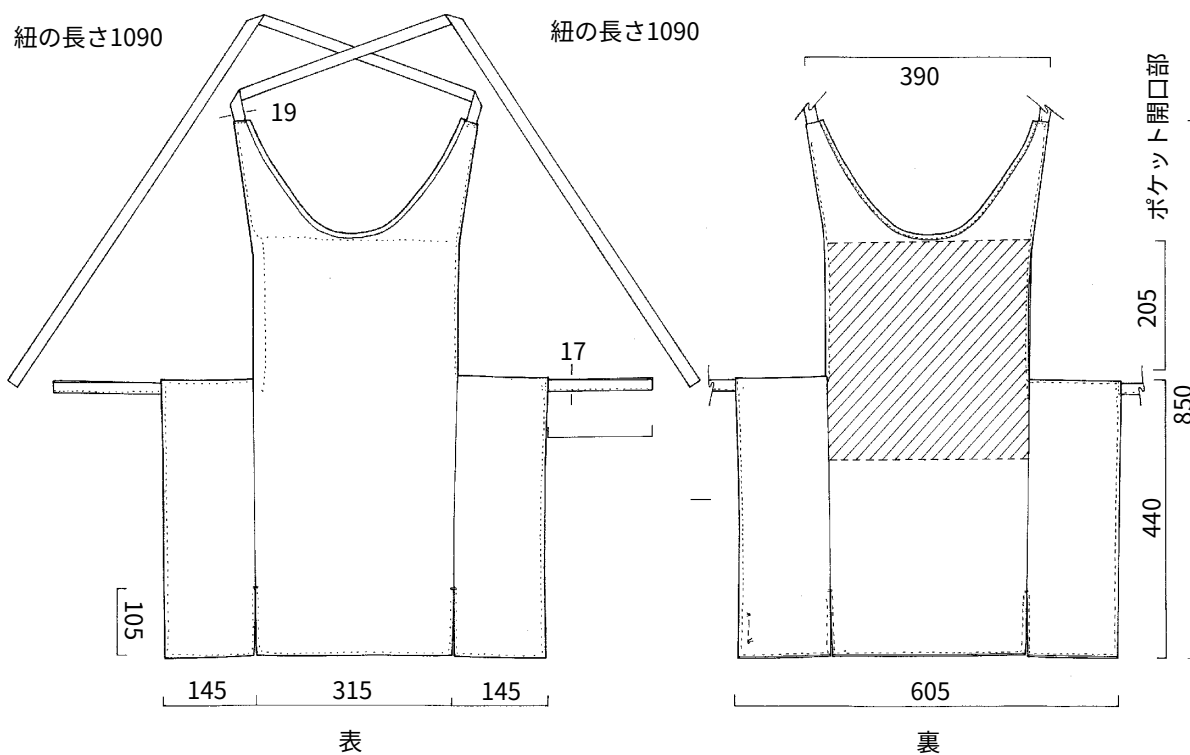
昔のまたぎは「てっぽうぼど」を着ていた。袖の形が「てっぽう」と呼ばれる形をしている。[ぼど]は必ず袷で、綿入れもあった。[もんぺ（尻が割れているもの）]を作る事ができる人は殆どいなくなった。千鶴子さんは打当内の柴田（明治40年頃の生）さんから裁ち方や縫い方を習って復元した。柴田さんは92、3歳で亡くなられた。鈴木家では「もの」を余所に貸して随分失ってしまったそうだ。幸い千鶴子さんが衣類を復元した事によって、打当地区のまたぎの衣類の様子を現在知る事ができると共に、後世にも伝える事が出来る訳である。

実測図 45



写真番号 119

- 写真番号 119
 実測図番号 45
 分類名 上衣
 資料名（地方） てっぽうぼど
 よみ Teppō-bodo
 重量 650g
 材料 地…綿布・平織り・糸の密度（5mm四方経糸13本×緯糸10本）・先染め・格子縞（黒地に黄色と緑色）。裏地…綿布・平織り・糸の密度（5mm四方経糸12本×緯糸11本）・紺。衿の生地…表地に同じ。掛け衿の生地…平織り・糸の密度（5mm四方経糸12本×緯糸14本）黒色の無地。紐…綿布・平織り・糸の密度（5mm四方経糸11本×緯糸10本）。縫い糸…黒色の綿糸1本どり（1部2本どり）。刺し糸…黒色の綿糸1本どり。
 用途 働く時も、「またぎ（狩猟）」に行く時も着用した。
 収納場所 当時使用されたものは松治専用の「行李」の中
 製作（入手）者 千鶴子（米孝の母昭和2年7月10日生）
 製作(入手)方法 保存用として復元。手縫い。袷仕立て。紐の仕立てはミシン縫い。表地と裏地を合わせて刺し子をしてから仕立てる。紐は背縫いの部分だけ縫いつけている。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ

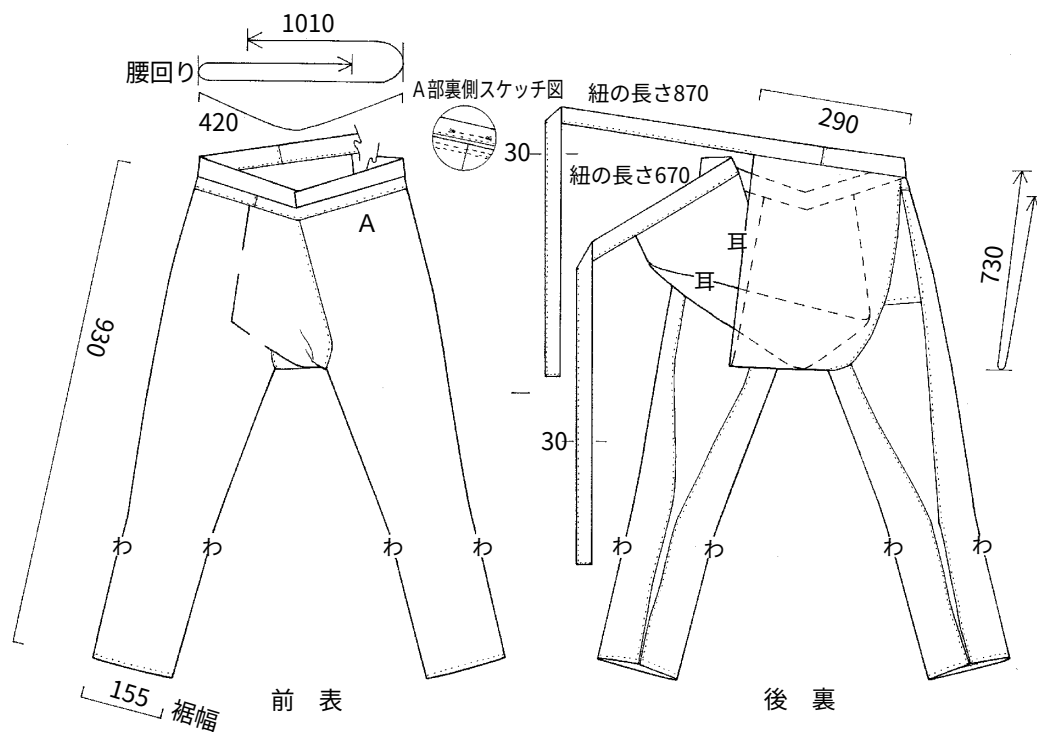


実測図 46



写真番号 120

- 写真番号 120
 実測図番号 46
 分類名 上衣
 資料名 (地方) まえかけ (はらかけ)
 よみ Mae-kake(Hara-kake)
 重量 202g
 材料 表地…綿布・平織り・糸の密度 (5mm四方経糸 10本×緯糸 9本)・濃紺色の無地。裏地…綿布・平織り・糸の密度 (5mm四方経糸 12本×緯糸 12本)・紫色の無地。ポケット地・紐…表地に同じ。縫い糸…黒色の綿糸。
 用途 [鉄砲] の道具や [弾] を入れる。必ず着けて行った。ポケットがたくさんついているので、使うものによって入れるところを決める。
 収納場所 当時使用されたものは松治専用の [行李] の中
 製作 (入手) 者 千鶴子
 製作 (入手) 方法 保存用に復元。手縫い。衿仕立て。白糸による印は昔はつけなかったが、保存用として鈴木千鶴子製作ということが分かるように付けた。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ

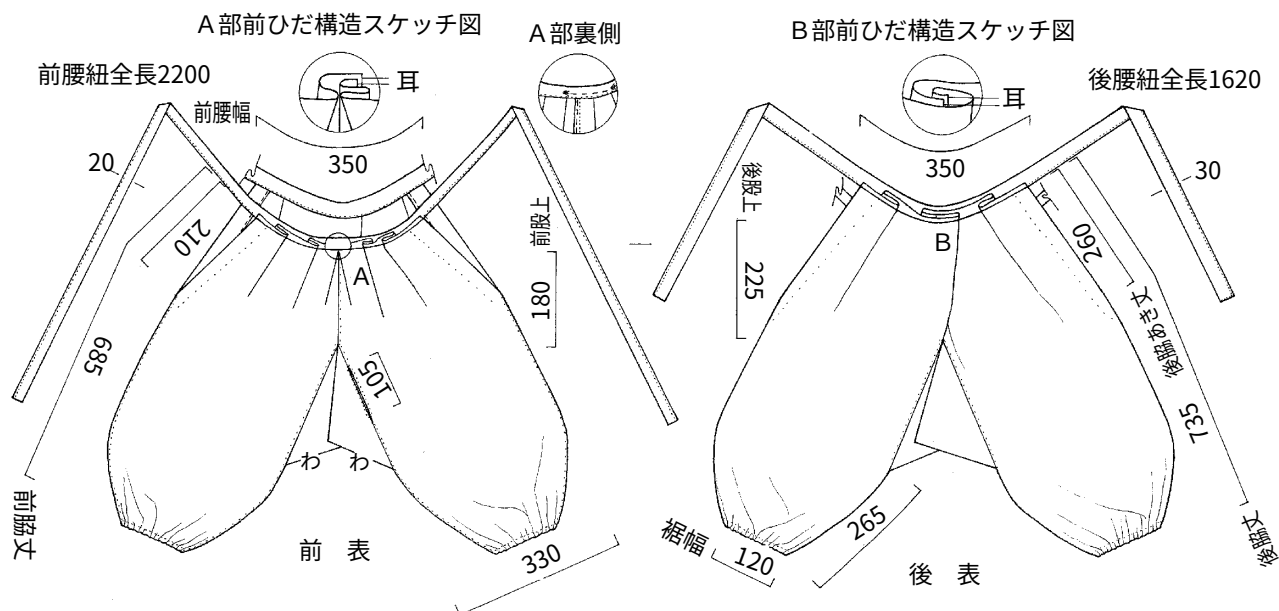


実測図 47



写真番号 121

- 写真番号 121
 実測図番号 47
 分類名 下衣
 資料名（地方） もんぺ（尻が割れているもの）
 よみ Monpe
 重量 354g
 材料 生地…綿布・平織り・糸の密度（5mm四方経糸10本×緯糸8本）・紺色の無地。紐…平織り・糸の密度（5mm四方経糸15本×緯糸11本）・黒色の地に茶系の縞。縫い糸…黒色の綿糸1本どり。ゴム紐。
 用途 農作業や「またぎ（狩猟）」の時に穿いた。
 使用者 松治
 使用年代 結婚した頃（昭和21年頃）には穿いていた記憶がある。
 収納場所 当時使用されたものは松治専用の〔行李〕の中
 製作(入手)方法 千鶴子が担当内の柴田（明治40年頃の生）さんから裁ち方縫い方を習って復元した。柴田さんは92、3歳で亡くなられた。手縫い。単衣仕立て。白糸による印は昔はつけなかったが、保存用として鈴木千鶴子製作ということが分かるように付けた。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ

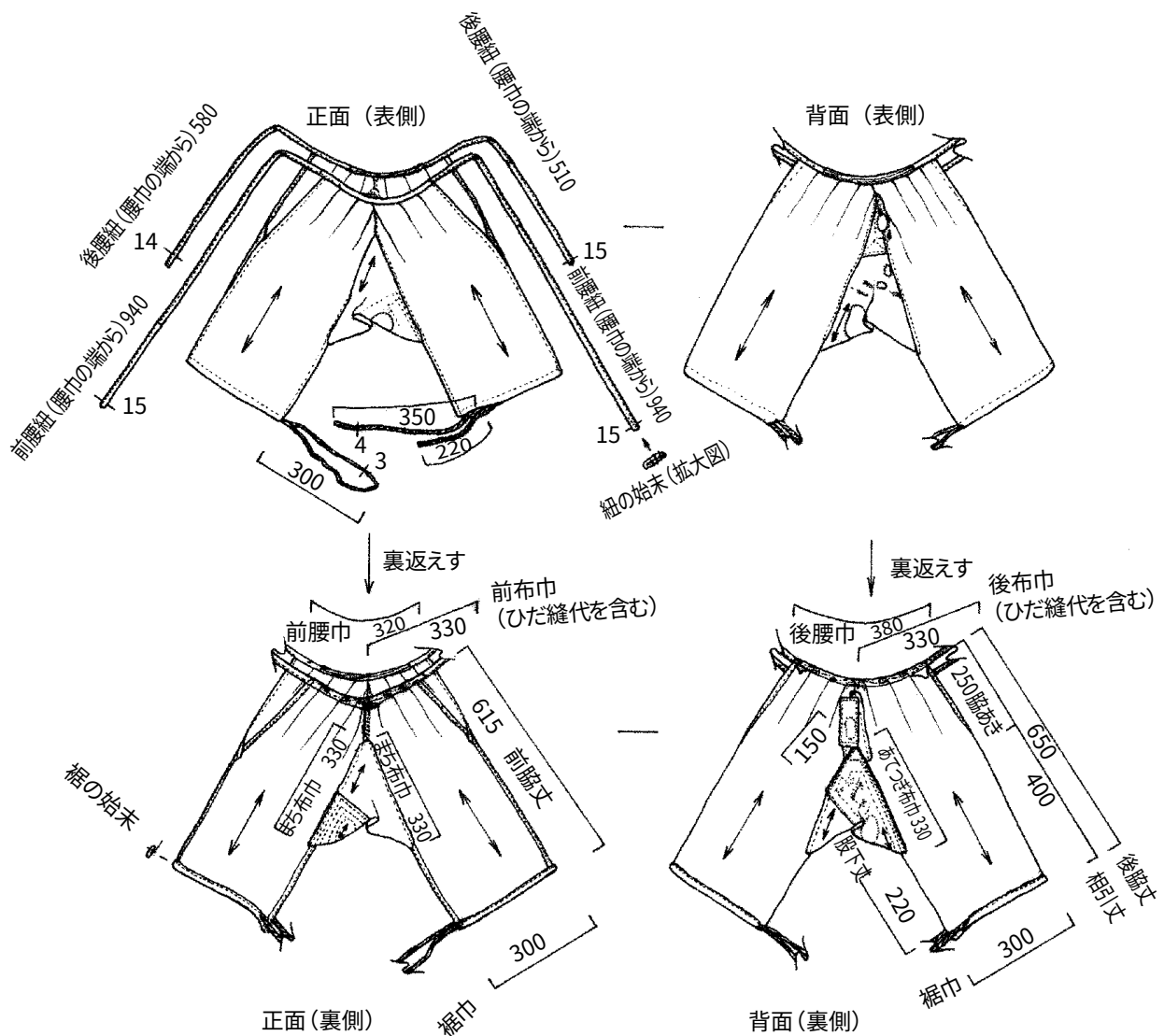


実測図 48



写真番号 122

- 写真番号 122
 実測図番号 48
 分類名 下衣
 資料名(地方) はかま
 よみ Hakama
 重量 282g
 材料 生地…綿布・平織り・糸の密度(5mm四方経糸11本×緯糸11本)・紺色の無地。紐…本体に同じ。縫い糸…黒色の綿糸。
 用途 「またぎ(狩猟)」の時に「もんぺ」の上に重ねて穿いた。
 収納場所 当時使用されたものは松治専用の「行李」の中
 製作(入手)方法 千鶴子が担当内の柴田(明治40年頃の生)さんから裁ち方縫い方を習って復元した。柴田さんは92、3歳で亡くなられた。手縫い。単衣仕立て。1幅(両端共に耳)の生地4枚で製作。襠も1幅である。裾はゴム紐使用。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ



実測図 49



写真番号 123

- 写真番号 123
- 実測図番号 49
- 分類名 下衣
- 資料名 (地方) はかま
- よみ Hakama
- 重量 215 g
- 材料 生地…木綿・平織り・糸の密度 (5mm四方 経糸11本×緯糸10本)・藍 (紺系) 色の無地・先染め。あてつき用生地…木綿・平織り・糸の密度 (5mm四方 経糸16本×緯糸14本)・藍 (紫系) 色の無地・先染め。腰紐…木綿・平織り・糸の密度 (5mm四方 経糸12本×緯糸9本)・藍 (黒系) 色の無地・先染め。縫い糸…黒色の綿糸
- 用途 「またぎ (狩猟)」の時に「もんぺ」の上に重ねて穿いた。
- 使用方法 着用時は紐の裾を絞り込んで結ぶ。紐の素材は不明。
- 製作(入手)方法 手縫い。単衣仕立て。この「はかま」は男物であるが、前の股の部分に開きがない。
- 旧所有者 泉 謙二郎 (寄託)
- 収蔵施設 マタギ資料館 (展示室)
- 作図者名 名久井芳枝

写真番号 124
 実測図番号 50
 分類名 手に着けるもの
 資料名 (地方) 手うえ (手甲)

よみ Te-ue(Tekko)

重量 43g

材料 ①生地…木綿・平織り・糸の密度(5mm四方
 経糸13本×緯糸13本)・濃紺色の無地。②
 生地…木綿・平織り・糸の密度(5mm四方
 経糸11本×緯糸12本)・濃紺色の無地。紐
 …毛・平織り・糸の密度(5mm四方 経糸
 10本×緯糸14本)。縫い糸…紺色の綿糸1
 本どり。指をかける部分…ビニール紐

用途 手首を保護するために手首に巻く、冷たい
 時の助けになる。

使用者 米孝も使った。

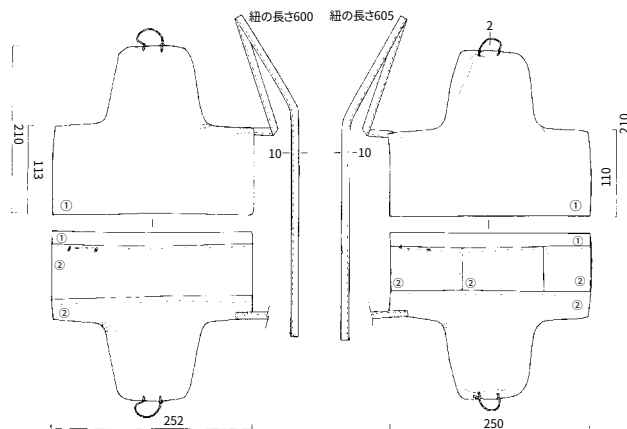
使用方法 手の中指にひっかけて手首に巻く(その上から手
 袋をはめる)。

収納場所 当時使用されたものは松治専用の「行李」の中

製作(入手)方法 保存用に復元。

収蔵施設 鈴木米孝家

作図者名 角館さえ



実測図 50



写真番号 124



写真番号 125

写真番号 125
 実測図番号 51
 分類名 手に着けるもの
 資料名 (地方) てっきやあし (てくりきやあし)

よみ Tekkyashi(Tekurikyashi)

重量 67.6g

材料 イヌの毛皮

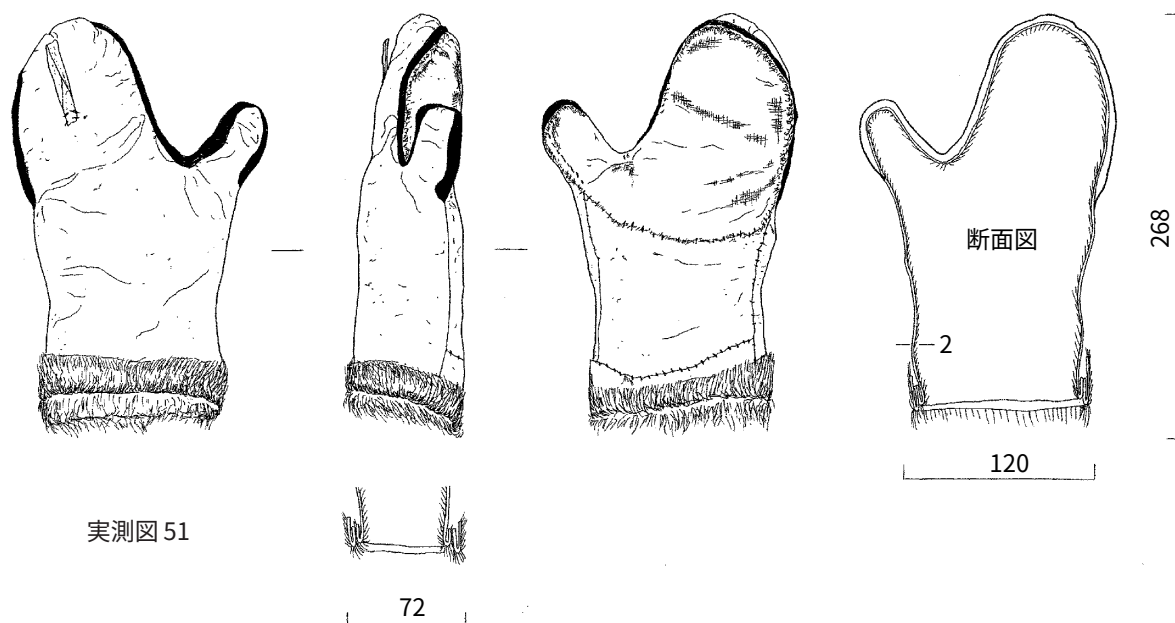
用途 山に猟に行く時、手にはめる。

使用方法 「またぎ(狩猟)」で銃を撃つ時などに、すぐに外せるよう
 に作られている。毛皮の方が内側。

製作(入手)者 マタギが自分で作る。

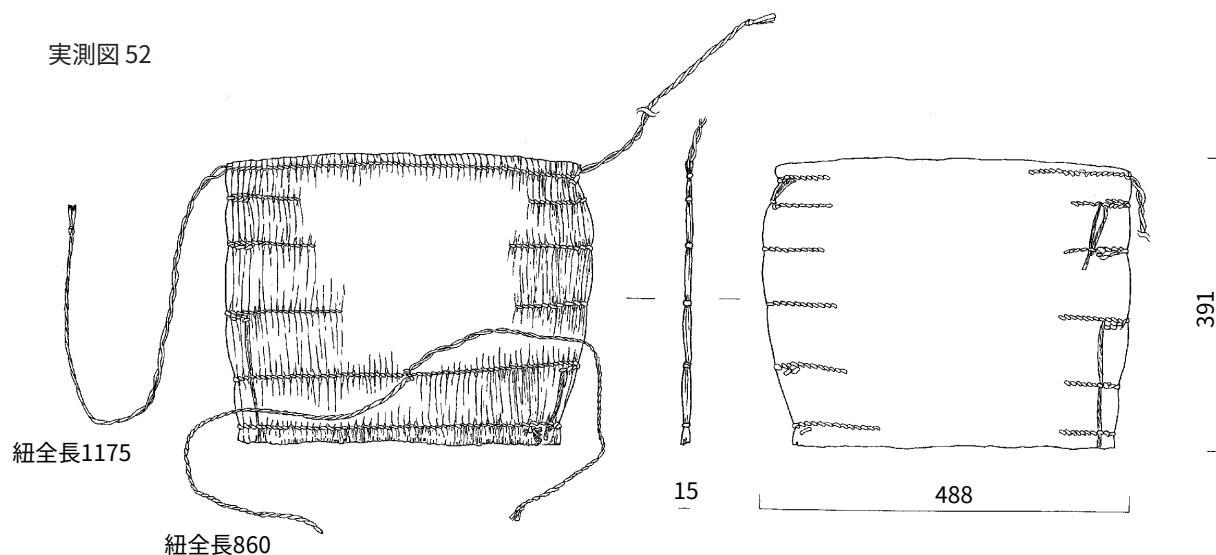
収蔵施設 鈴木米孝家

作図者名 田崎美紀子



実測図 51

実測図 52



- 写真番号 126-1・126-2
 実測図番号 52 (写真番号 126-1)
 分類名 足に着けるもの
 資料名 (地方) ガマはんばき
 よみ Gama-hanbaki
 重量 126-1…片方130.8g 126-2…両方で190g
 材料 ガマ材
 用途 柴などから脛を保護する。
 使用者 松治までは使用、米孝は使ったことがない。
 使用場所 山
 使用方法 米孝は、父が「乗馬ズボン」の上の脛の部分
 に着けていたのを見たことがある。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 田崎美紀子



写真番号 126-1

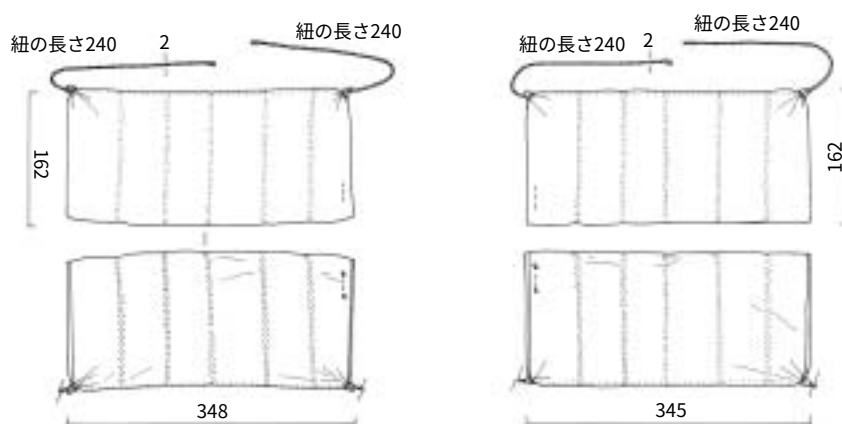


写真番号 126-2



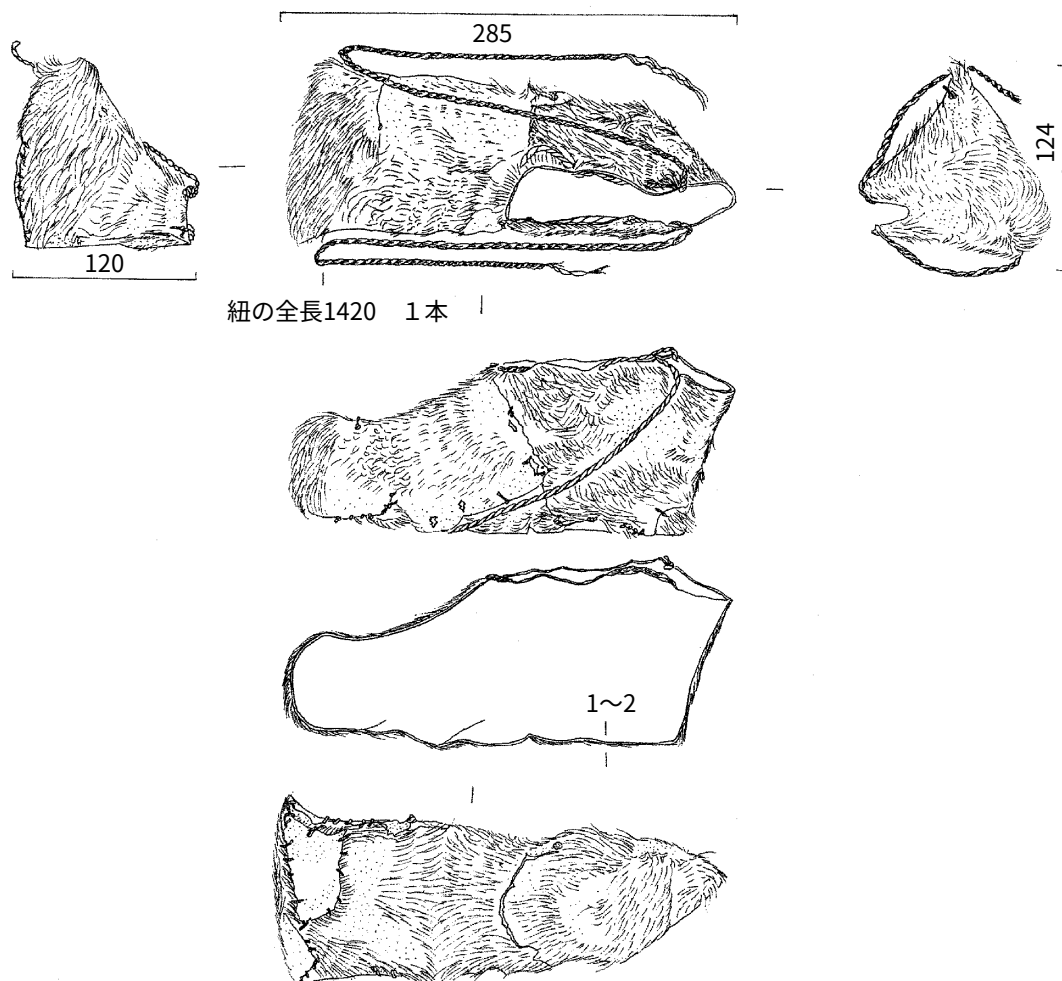
写真番号 127

実測図 53



- 写真番号 127
 実測図番号 53
 分類名 足に着けるもの
 資料名 (地方) 小はんばき
 よみ Ko-hanbaki
 重量 両方合わせて 40g
 材料 表地…木綿・平織り・糸の密度 (5mm四方 経糸10本×緯糸10本)・濃紺色の無地。裏地…木綿・平織り・糸の密度 (5mm四方 経糸13本×緯糸14本)・紺色の無地。紐…白色のビニール。刺し糸…白色の綿糸2本どり。縫い糸…黒色の綿糸1本どり。
 用途 踵や足首の保護
 使用方法 「つまご」を履く前に踵から足首にかけて巻き付ける。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ

履き物

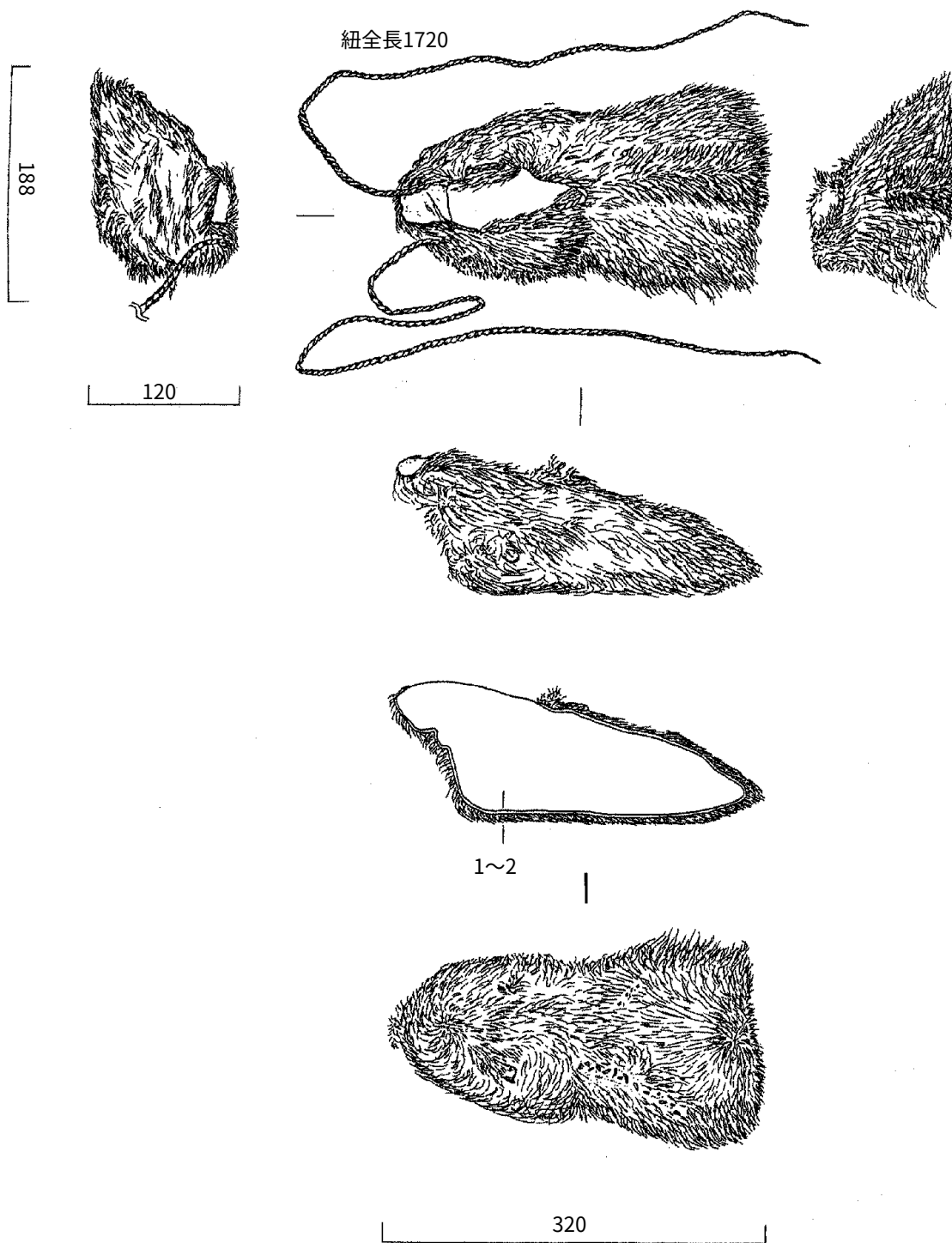


実測図 54



写真番号 128 - 1

- 写真番号 128 - 1・128 - 2
 実測図番号 54 (写真番号 128 - 1)・55 (写真番号 128 - 2)
 分類名 履き物
 資料名 (地方) 毛たび
 よみ Ke-tabi
 重量 実測図番号 54…250g 実測図番号 55…108g
 材料 アオシシ (カモシカ) の皮
 用途 「またぎ (狩猟)」の時の履き物
 備考 付け札には「あぶけぐるみ」の名称がある。3地区の聞き取り調査では確認できなかった。
 旧所有者 鈴木辰五郎 (寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館 (収蔵庫)
 作図者名 54…武田千鳥・55…田崎美紀子



実測図 55

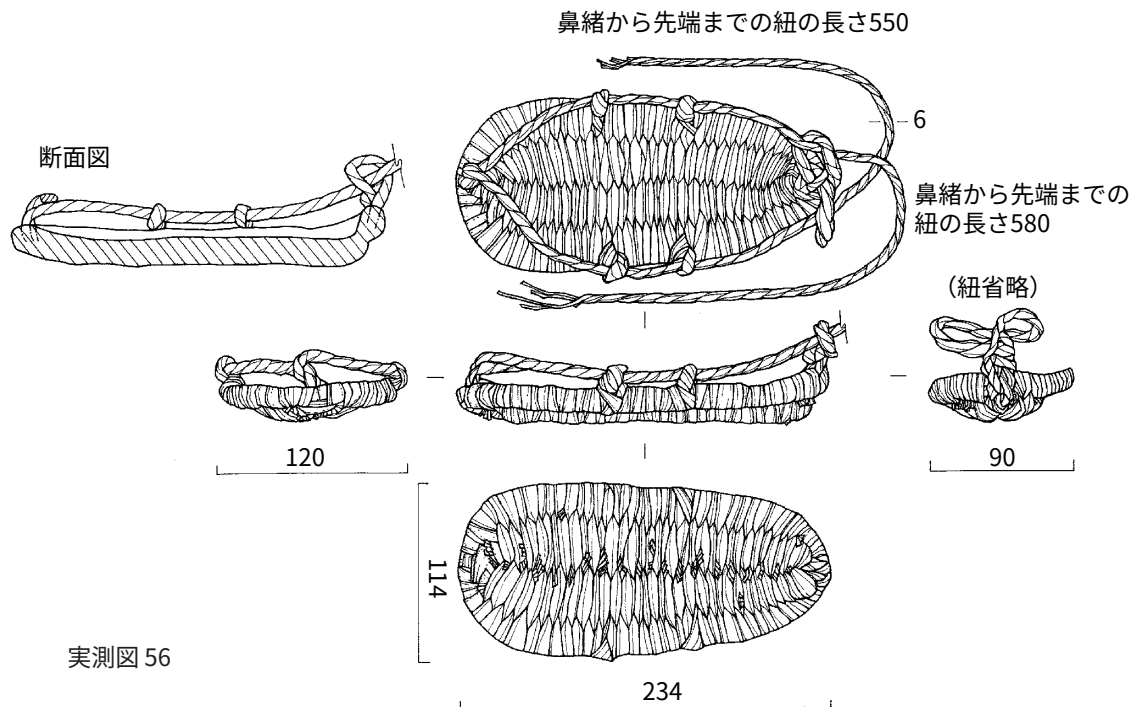


写真番号 128 - 2

写真番号 129
 分類名 履き物
 資料名(地方) 毛たび
 よみ Ke-tabi
 重量 200g
 材料 アオシシ(カモシカ)の皮
 用途 「またぎ(狩猟)」の時の履き物
 備考 付け札には「あぶけぐるみ」の名称がある。3地区の聞き取り調査では確認できなかった。
 旧所有者 鈴木松治
 収蔵施設 マタギ資料館(収蔵庫)



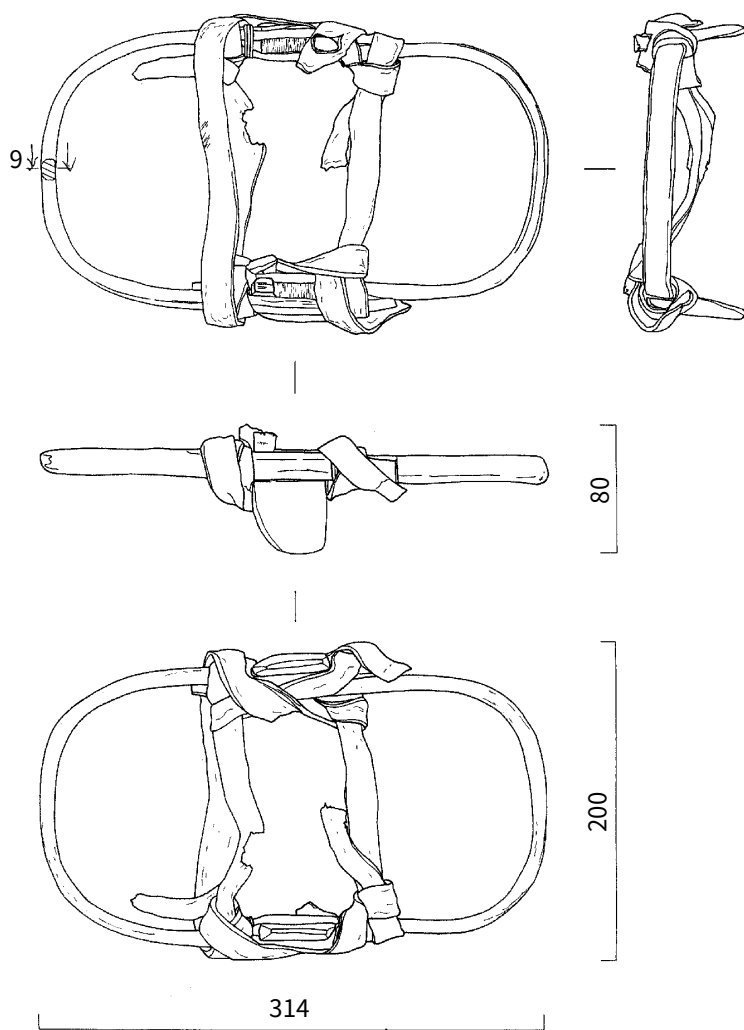
写真番号 129



写真番号 130
 実測図番号 56
 分類名 履き物
 資料名(地方) わらじ
 よみ Waraji
 重量 両方で 215g
 材料 藁材
 用途 足に履く
 使用方法 普段の山仕事、家の周りでも履いていた。
 製作(入手)者 松治
 製作(入手)方法 千鶴子は、夜松治が「ゆるぎ(炉)」の傍で作っていたのを覚えている。
 備考 松治が「またぎ(狩猟)」に出掛ける時の履き物は「つまご」だった。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 角館さえ



写真番号 130



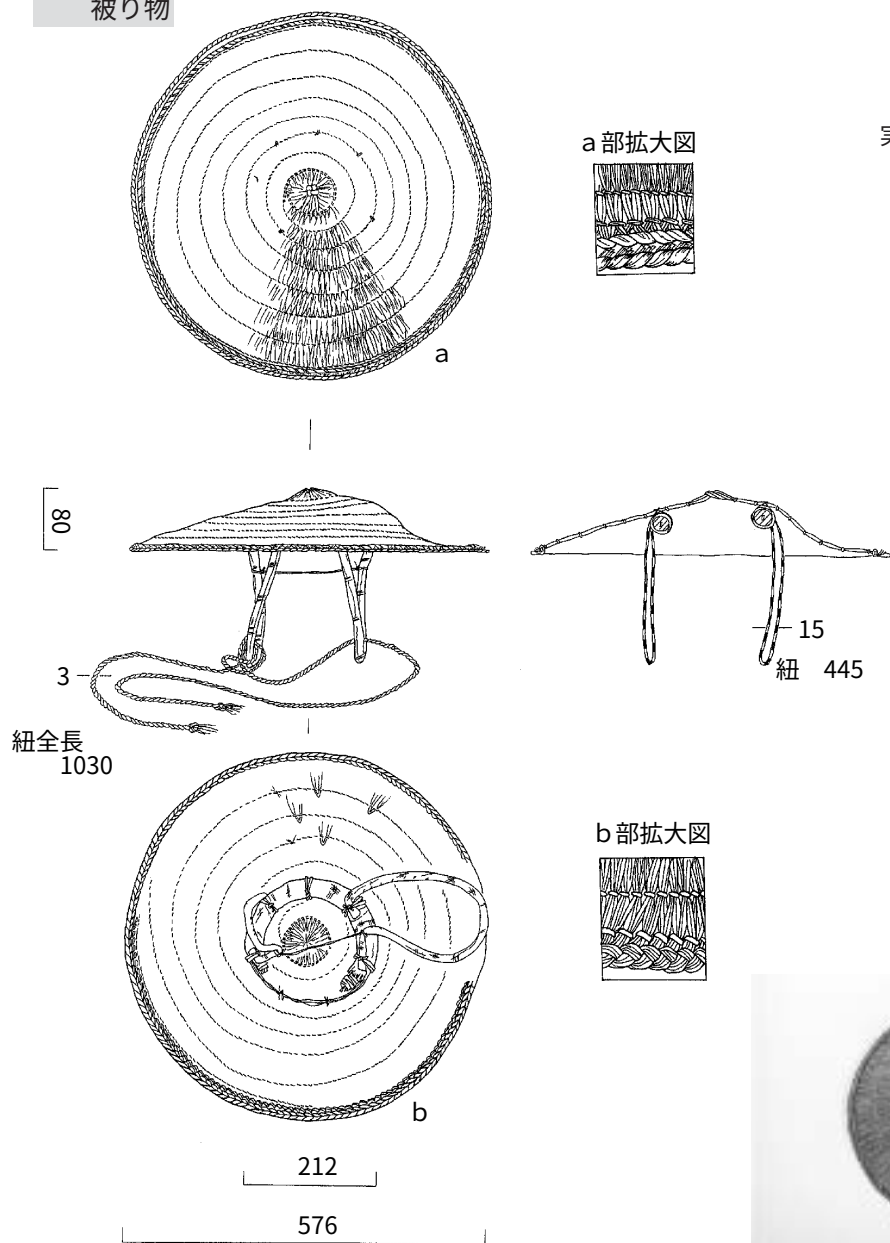
実測図 57



写真番号 131

- 写真番号 131
 実測図番号 57
 分類名 履き物
 資料名 (地方) わりきやんずき
 よみ Wari-kyanzuki
 重量 231.8g
 材料 イタヤ材 牛革
 用途 雪の深い時は、足がずぶりと雪の中に入り込んで歩けなくなるので、雪の中に足が沈み込まないように必ず履いた。
 使用者 松治。他の「きやんずき」は今も使っている。
 収納場所 当時、衣類を除いた「またぎ (狩猟)」に使う用具一式は、玄関脇の「こまやっこ (物置)」の棚に保管していた。
 製作(入手)方法 イタヤ材を割ったものを曲げて作るので「わりきやんずき」と言う。
 備考 牛革の部分は雨に濡れると伸びるので使いにくい。米孝は牛革ではなくビニール紐のものを使用していた。[かんじき]を履いていない時は生ゴムの靴を履いていた。この靴を「ぼっく靴」と呼び、父松治も米孝も履いた。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 田崎美紀子

被り物



実測図 58



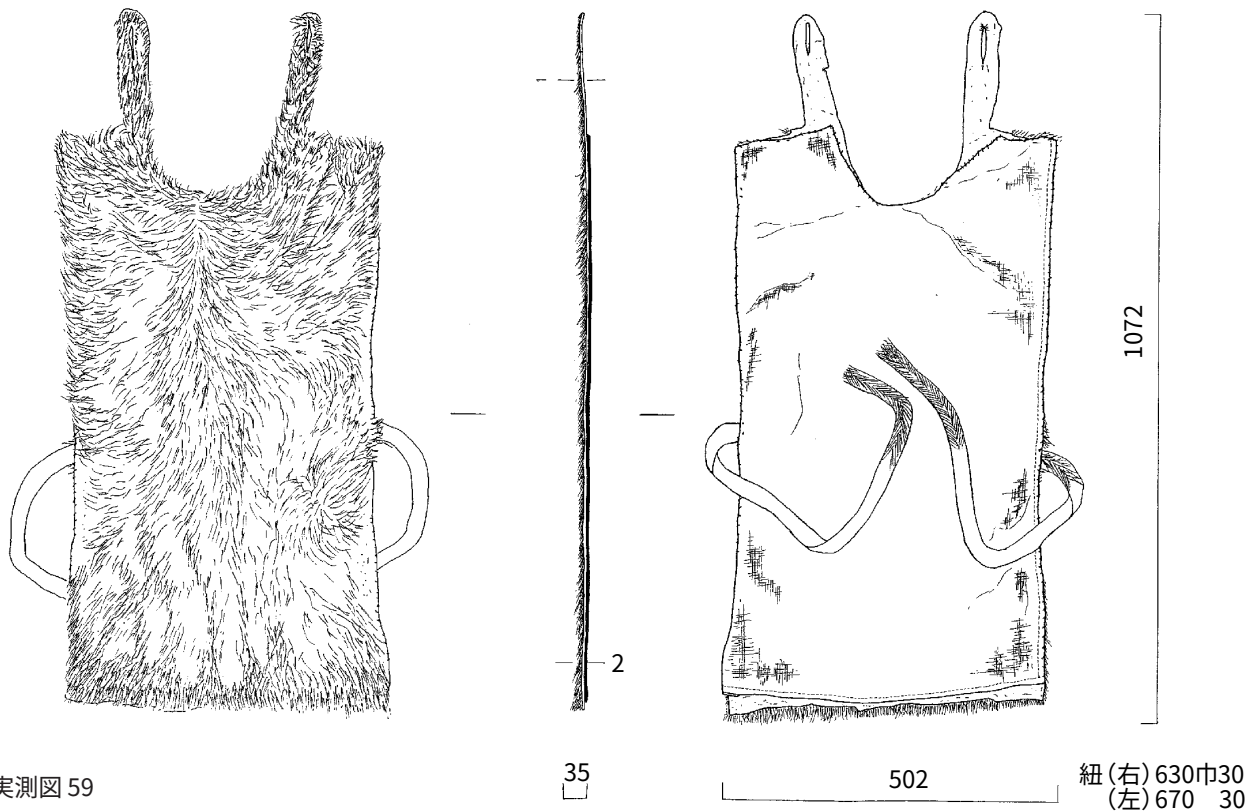
写真番号 132 - 1



写真番号 132 - 2

写真番号	132 - 1	132 - 2
実測図番号	58	
分類名	被り物	
資料名 (地方)	あまぶた (山笠)	
よみ	Ama-buta(Yama-gasa)	
重量	209g	
材料	スゲ材	
用途	雨よけ・雪よけ・防寒のために頭にかぶる	
使用者	不明 (米孝は使用していない。父松治が使用しているのも見たことがない。)	
使用方法	[ふろしき] のような四角い布を三角に折って、頭と耳と背中を覆って顎の下で結び、それから[あまぶた]を被る。	
収納場所	当時、衣類を除いた「またぎ (狩猟)」に使う用具一式は、玄関脇の「こまやっこ (物置)」の棚に保管していた。	
製作(入手)年代	孝之助 (米孝の祖父) よりも前の代に製作されたものか？	
備考	[ふろしき] のような四角い布は「あまぶた」を使用しなくなってからも使用していた。これは松治も米孝も使用した。	
収蔵施設	鈴木米孝家	
作図者名	田崎美紀子	

防寒具



- 写真番号 133-1-表 133-1-裏・133-2-表 133-2-裏
 実測図番号 59 (写真番号 133-1)
 分類名 防寒具
 資料名(地方) 着皮
 よみ ki-gawa
 重量 133-1...690g 133-2...680g
 材料 イヌの毛皮
 用途 雨よけ、防寒用として「またぎ(狩猟)」の時や山仕事の時は常時着用した。暖かい上に背中と「着皮」の間に隙間ができるため、汗をかかなくて良かった。「いっぶく」する時に背中からずらして敷き皮にして座った。
 使用者 松治
 使用方法 山へ行く時、寒さをしのぐために背中に着用する。薪をとりに行く時など「そり」を担ぐ事もあるので着用する。薪とりの時は1日に何十回も往復した。
 収納場所 当時、衣類を除いた「またぎ(狩猟)」に使用用具一式は、玄関脇の「こまやっこ(物置)」の棚に保管していた。
 製作(入手)方法 雑種犬など、いろいろなイヌの毛皮を使用して作る。
 備考 「着皮」はサイズの異なるものがあり、サイズの大きいものは山仕事の時に着用し、小さいものは「またぎ(狩猟)」へ行く時に着用する。
 収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 田崎美紀子



写真番号 133 - 1 - 表



写真番号 133 - 1 - 裏

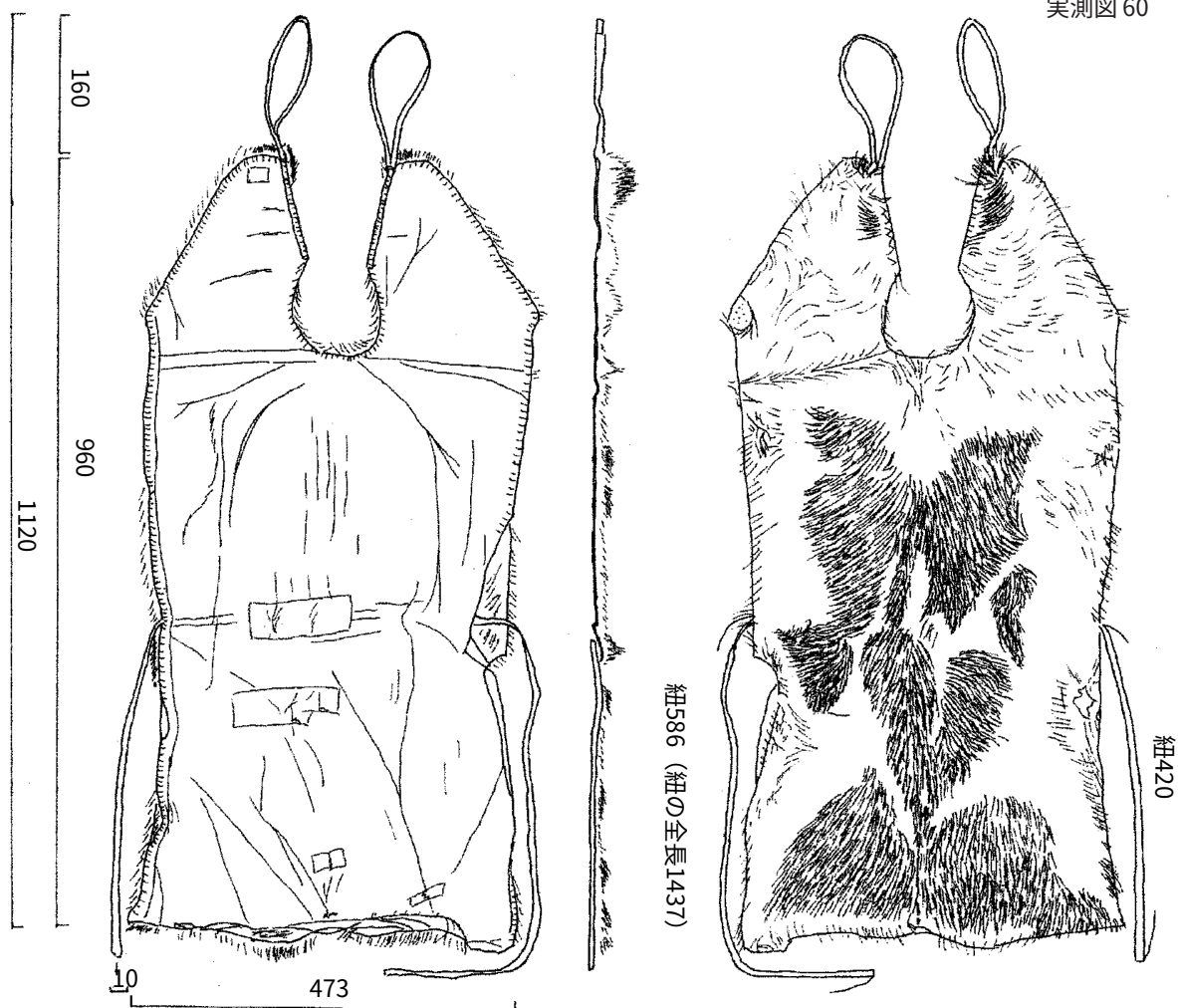


写真番号 133 - 2 - 表



写真番号 133 - 2 - 裏

実測図 60

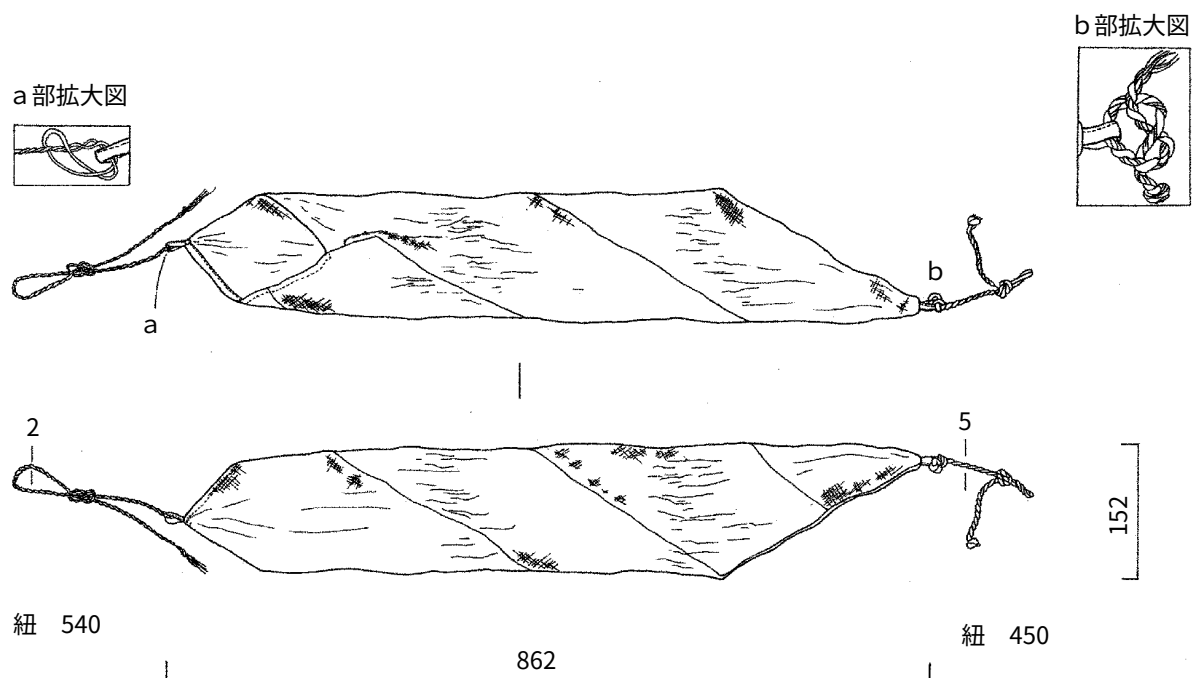


- 写真番号 134
 実測図番号 60
 分類名 防寒具
 資料名(地方) 着皮
 よみ Ki-gawa
 重量 550g
 材料 イヌの毛皮
 材料入手方法 マタギ仲間で猟の後や会合などでお酒を飲んだ時などに、仲間達からイヌ皮をもらう事もあった。
 用途 雨よけ、防寒用として「またぎ(狩猟)」の時や山仕事(薪の運搬など)の時は常時着用した。暖かい上に背中と「着皮」の間に隙間ができるため、汗をかかなくて良かった。「いっぶく」する時に背中からずらして敷き皮にして座った。「いっぶくする」というのは次の段取りの打ち合わせとか、ご飯を食べる時、その辺を眺める時などに使う言葉。
 使用者 松治
 使用方法 肌着の上に「セーター」や「シャツ」を着て「着皮」を着用した。ただし、暖かい時は、肌着の上にすぐ「着皮」を着用した。松治の頃は主に「パンツ」「股引」「ずぼん」のスタイルになっていた。
 収納場所 乾燥しないように陽の当たらない所に置く。鈴木家では梁の上に吊り下げていた。
 製作(入手)者 昭和60年代に父松治が「にわ」で作るのを見たことがある。
 製作(入手)方法 イヌの皮をなめす。ホウ酸を使用して脂を取る。
 備考 自分の家のイヌを「着皮」にすることはなかなかできなかったものだ。製作は簡単にできず、相応の技術が必要とする。しっかりと製作しなければ、虫が付く。米孝は作ったことがない。
 旧所有者 鈴木米孝(打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 湯沢こずえ



写真番号 134

袋物

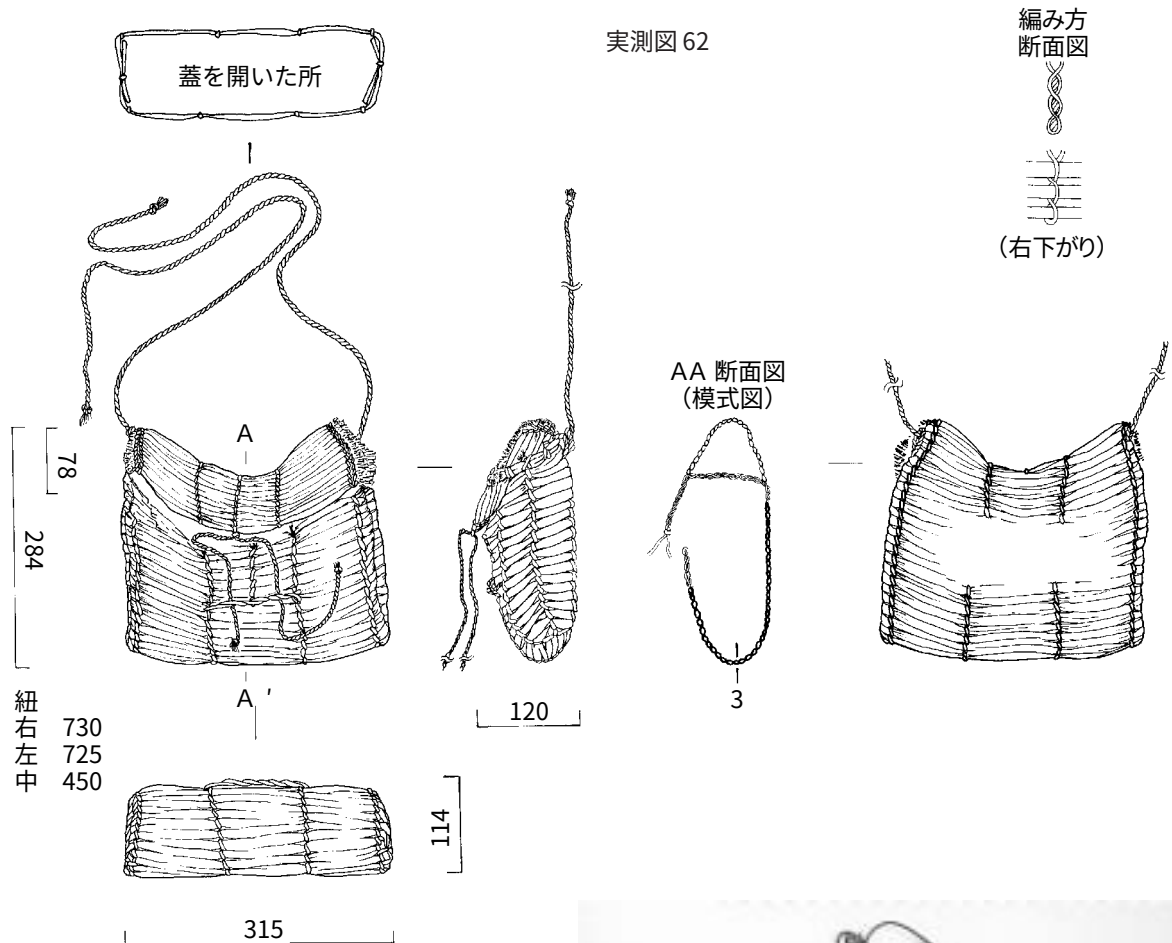


実測図 61



写真番号 135

写真番号	135
実測図番号	61
分類名	袋物
資料名(地方)	くらげ
よみ	Kurage
重量	35.6g
材料	生地…麻布・平織り・糸の密度(5mm四方経糸9本×緯糸10本)・縫い糸…黒色
用途	弁当や獲物入れ。
製作(入手)方法	ミシン縫い 単衣仕立て
旧所有者	鈴木松治(打当地区、寄託)
備考	「またぎ(狩猟)」に行く時は「ズック袋」も背負っていた。その中には「マフラー」や着替えを入れた。着替えは必ず持って行った。
収蔵施設	マタギ資料館(収蔵庫)
作図者名	田崎美紀子



写真番号 136

写真番号 136
 実測図番号 62
 分類名 袋物
 資料名 (地方) けどし
 よみ Ke-doshi
 重量 315g
 材料 ガマ材

用途 一人分の弁当を入れた。[風呂敷] でただ包むよりは、ご飯がさめにくく保温性があった。

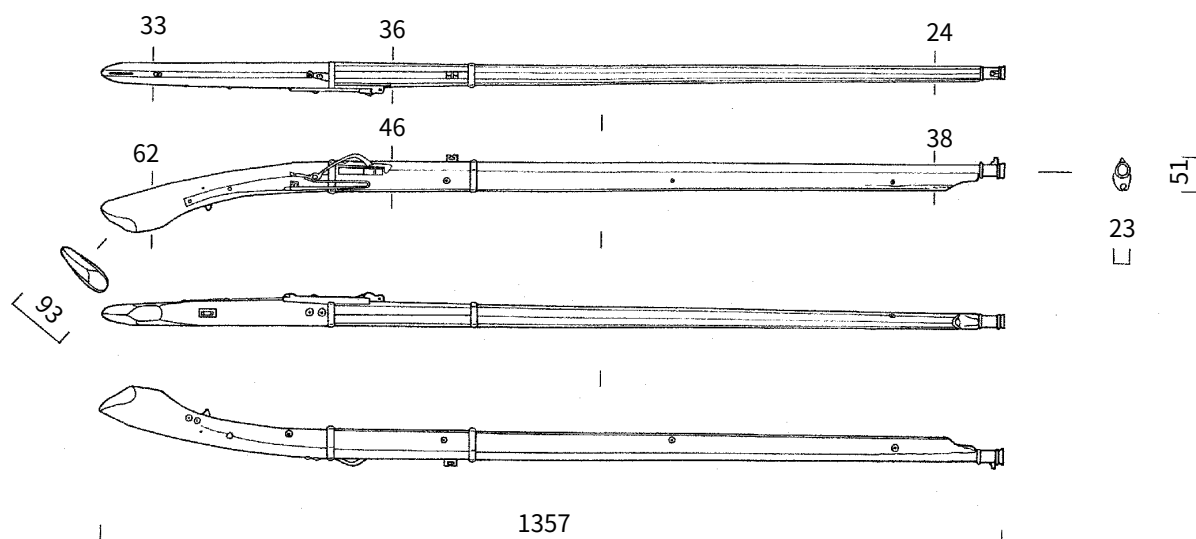
使用者 松治以前の先祖。松治も使用した。

使用方法 肩に掛けたり、腰に下げたりした。

備考 松治の時は千鶴子が作った弁当を持って行った。しゃけの塩引きを入れたおにぎりは大きめに作って、3個持って行った。松治は「家に帰り着くまでに何があってもいいように、予備として必ず1個は残しておかなければいけない」と言っていた。いくらおなが空いても、家に帰り着くまではおにぎりを1個残していた。がっこ（漬け物）があればそれも「けどし」に入れた。千鶴子が嫁にきた頃の弁当は、米の粉で作った「しとぎ」を持って行った。「ゆるぎ」のあく（灰）の中に入れて、焼きがたがつくまで焼くとあく（灰）がつかなくなるので、それを持って行った。25、6年前にお餅にバターを入れて搗くと固くならない事が分かり、そういう餅を持って行ったりした。干し餅も持って行った。干し餅は薄く短冊型に切ったものを、寒中に外において凍らせてから乾燥させたものである。松治が朝3時頃発つ時は、女は1時ちょっと過ぎには起きて準備をした。「ゆるぎ（炬）」の上にかかっている「鉄鍋」でご飯を炊いた。

収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 田崎美紀子

狩猟用具

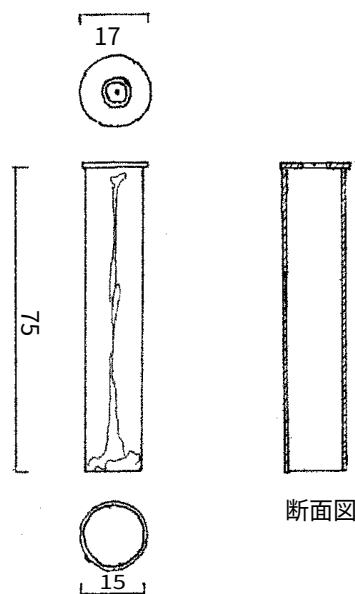
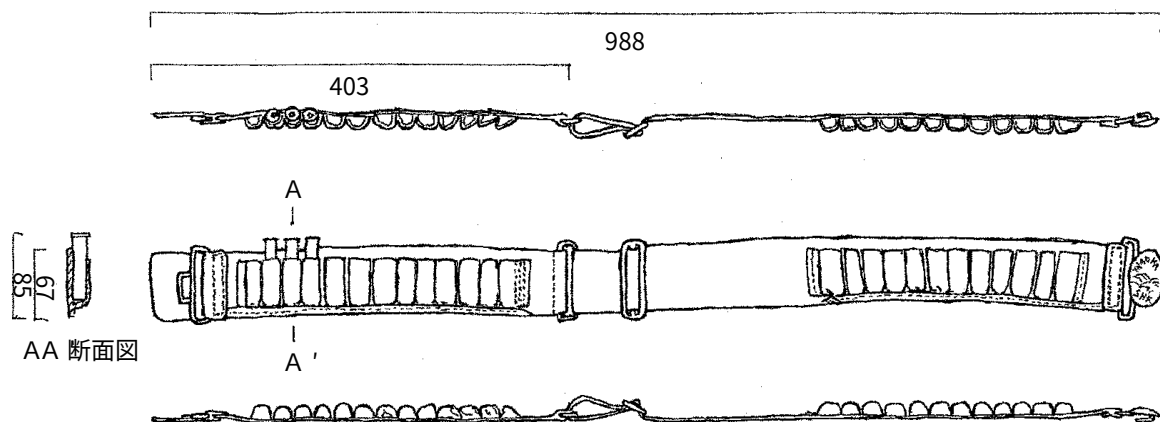


実測図 63



写真番号 137

写真番号 137
 実測図番号 63
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 火縄銃
 よみ Hinawa-jū
 重量 3.5 kg
 備考 銃砲刀剣類登録証…登録記号番号—秋田県 第 27477 号
 旧所有者 泉 明博(打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 田崎美紀子



実測図 64



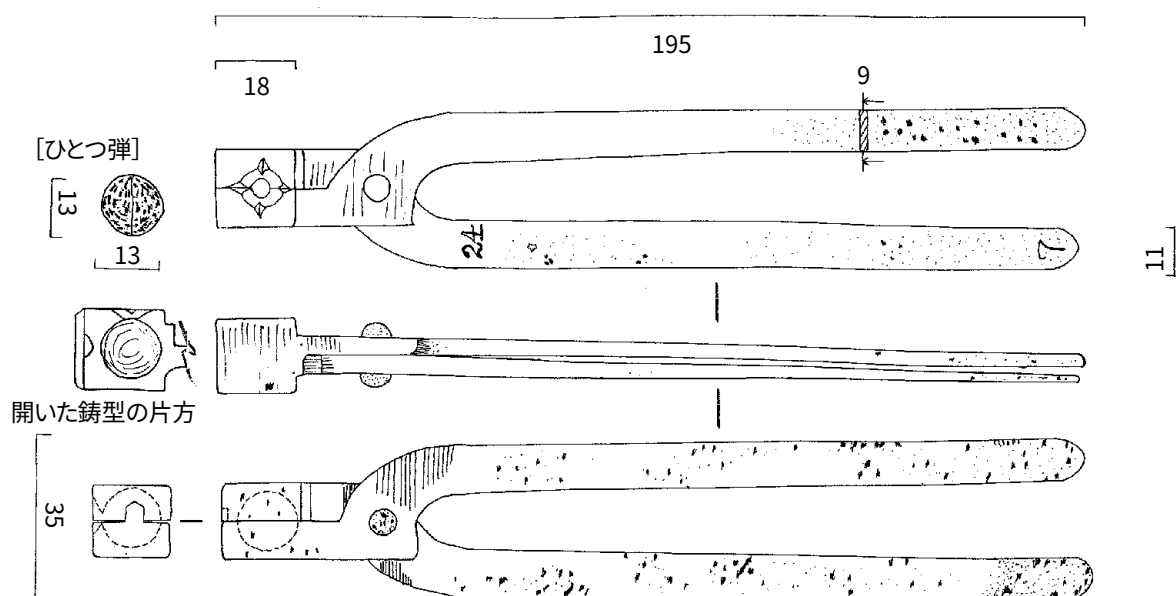
写真番号 138

- 写真番号 138
 実測図番号 64
 整理分類 狩猟用具
 資料名(地方) ばんど(弾帯)・薬莢
 よみ Bando(Dan-tai)・Yakkyō
 重量 350g
 材料 ばんど…革 薬莢…真鍮材
 用途 [ばんど] は実弾を納めて携帯する用具。[薬莢] は「雷管」や火薬や「弾」をこめる入れ物
 使用方法 [薬莢] には発火用の「雷管」を「雷管抜き」と言われている道具で押し込む。「雷管」はピンのようなもので押し込むと危険だが、この道具の押し込み部分は「雷管」部分より大きいので安全である。「弾」を入れる前に火薬を「秤」で量ってから入れて、「詰め棒」でぎゅっと押す。ねらいをつけた獲物までの距離によって、火薬の量を決める。詰めた火薬の上に1、2mmの「厚紙」で作った「押し蓋」を入れて「詰め棒」で押す。次に「弾」を込める。大きい「弾(クマ用)」は1個装着し、小さい「弾(小動物用)」は30個程度装着してからまた「押し蓋」をする。
- 製作(入手)者 鍛冶屋が作ったと思われるが、どこの鍛冶屋かは不明である。
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 湯沢こずえ

写真番号 139
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） ばんど（弾帯）
 よみ Bando(Dan-tai)
 重量 380g
 旧所有者 鈴木松治（寄託）
 収蔵施設 マタギ資料館（展示室）



写真番号 139

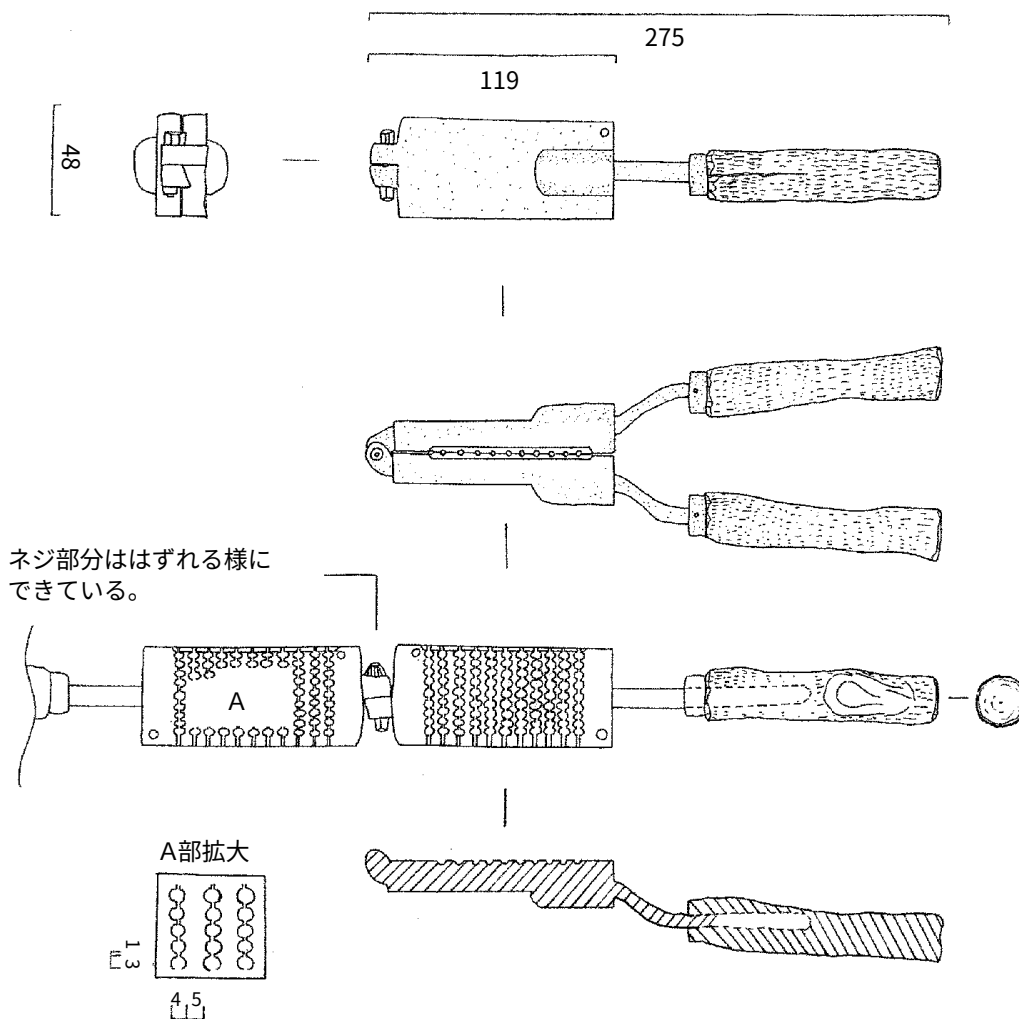


実測図 65



写真番号 140

写真番号 140
 実測図番号 65
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） 鋳型（ひとつ弾用）
 よみ I-gata(Hitotsu-dama-yô)
 重量 120 g
 材料 鉄材
 用途 ひとつ弾用の鋳型
 使用方法 米孝は炉の火を利用して、缶詰の缶に板鉛を入れて熱して溶かすのを見たことがある。かつては「柄ざら」に入れた鉛を炭火の熾きた「七輪」の上で加熱して溶かし、鋳型に流して「弾」を作った。「鋳型」を事前に温めておく。
 収蔵施設 マタギ資料館（展示室）
 作図者名 武田千鳥



実測図 66



写真番号 141

写真番号 141
 実測図番号 66
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 鋳型(散弾用)
 よみ I-gata(San-dan-yô)
 重量 1.1 kg
 材料 鉄材
 用途 [村田銃] の [散弾] を作る時の [鋳型]。
 使用方法 米孝は炉の火を利用して、缶詰の缶に板鉛を入れて熱して溶かすのを見たことがある。かつては [柄ざら] に入れた鉛を炭火の熾きた [七輪] の上で加熱して溶かし、[鋳型] に流して [弾] を作る。[鋳型] を事前に温めておく。そして、二つの物を合わせておいて、ある程度鉛を入れておく。そして、再度鉛を流し込んで火にかけて熱し、その後冷ます。
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 武田千鳥

写真番号 142
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 村田銃の [ひとつ弾]・[散弾]・[なまり]
 よみ Murata-jū-no-Hitotsu-dama・San-dan・Namari
 材料 板鉛材、写真番号 142 の右端の [なまり] は、弾をつぶして作ったものと思われる(鈴木米孝談)
 材料入手方法 鉾山関係の人から入手。あるいは阿仁合の市で入手。
 用途 村田銃の弾
 使用方法 大きい物はクマ用、小さい物はウサギ、ヤマドリ、タヌキ、キツネなどの狩猟用として使用する。
 備考 米孝は炉の火を利用して、缶詰の缶に板鉛を入れて熱して溶かすのを見たことがある。かつては [柄ざら] に入れた鉛を炭火の熾きた [七輪] の上で加熱して溶かし、[鑄型] に流して [弾] を作った。
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)

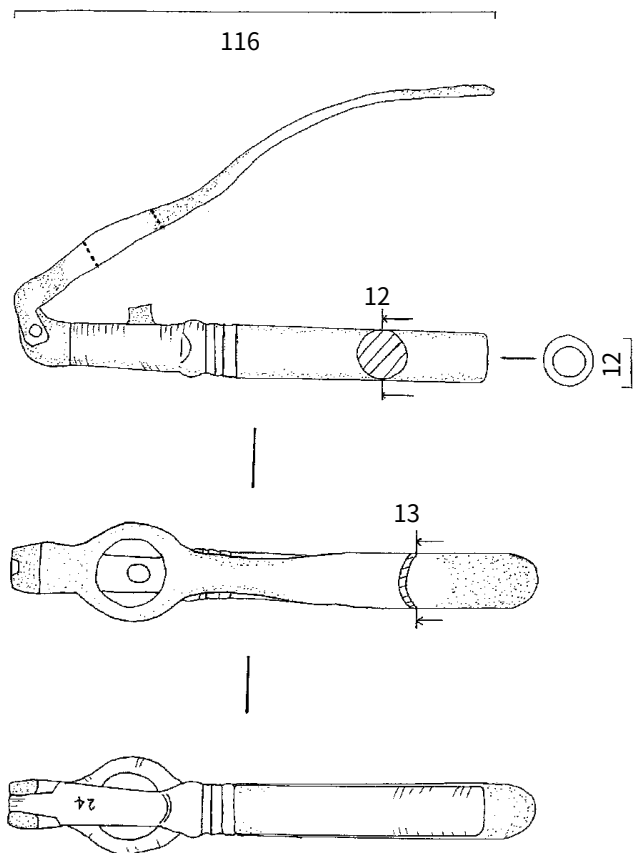


写真番号 142

実測図 67

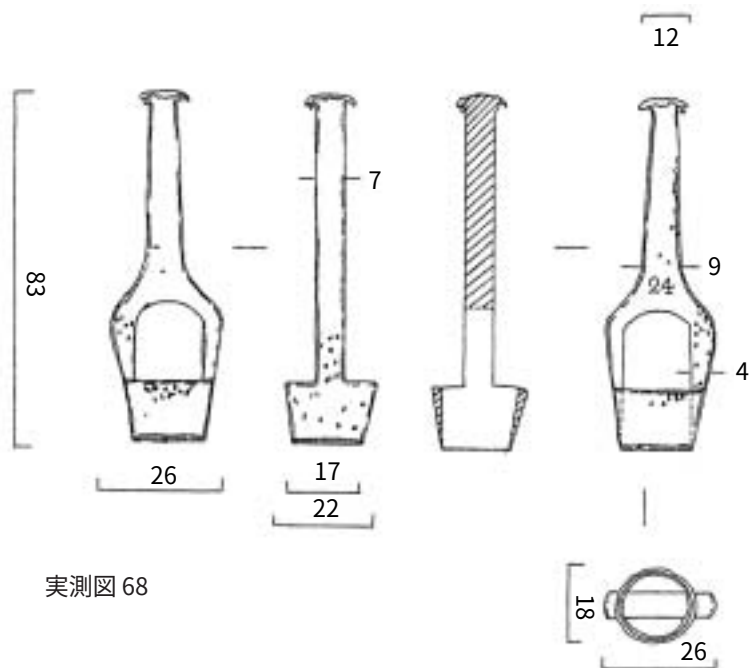


写真番号 143



写真番号 143
 実測図番号 67
 分類名 狩猟用具
 資料名(地方) 雷管抜き
 よみ Raikan-nuki
 重量 169g
 用途 発火用の [雷管] を抜いたり、押し込めたりするために使用。[薬莢] には、発火用の [雷管] を [雷管抜き] といわれている道具で押し込む。[雷管] はピンポイントで押し込むと危険だが、この道具の押し込み部分は [雷管] 部分より大きいので安全である。[雷管] を抜く場合は [薬莢] の中に入れて押し出す。
 備考 1 度使った [雷管] は 2 度と使えないので、抜いておく。現在の [薬莢] はビニール製で使い捨てだが、真鍮性の [薬莢] は何度も使えた。新しい [雷管] を使って、その [薬莢] で再び [実弾] を作った。
 収蔵施設 マタギ資料館(収蔵庫)
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 作図者名 武田千鳥

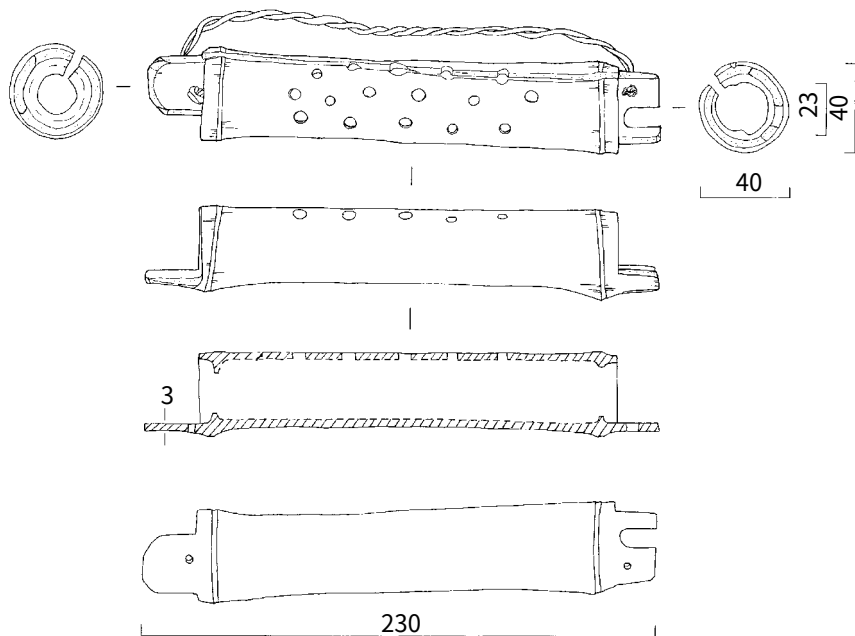
写真番号 144 - 左
 実測図番号 68
 分類名 狩猟用具
 資料名 (地方) 厚紙抜き
 よみ Atsugami-nuki
 重量 45 g
 用途 [実弾] を作る時の [厚紙] を円形に抜く
 使用者 鈴木家の人々
 使用方法 [厚紙] を打ち抜く道具に [厚紙] を当てて、[ハンマー] で叩いて打ち抜いた。米孝が子供の頃、父松治が [実弾] を作る時に [厚紙] を切る手伝いをした。
 収蔵施設 マタギ資料館 (収蔵庫)
 旧所有者 鈴木松治
 作図者名 武田千鳥



実測図 68



写真番号 144

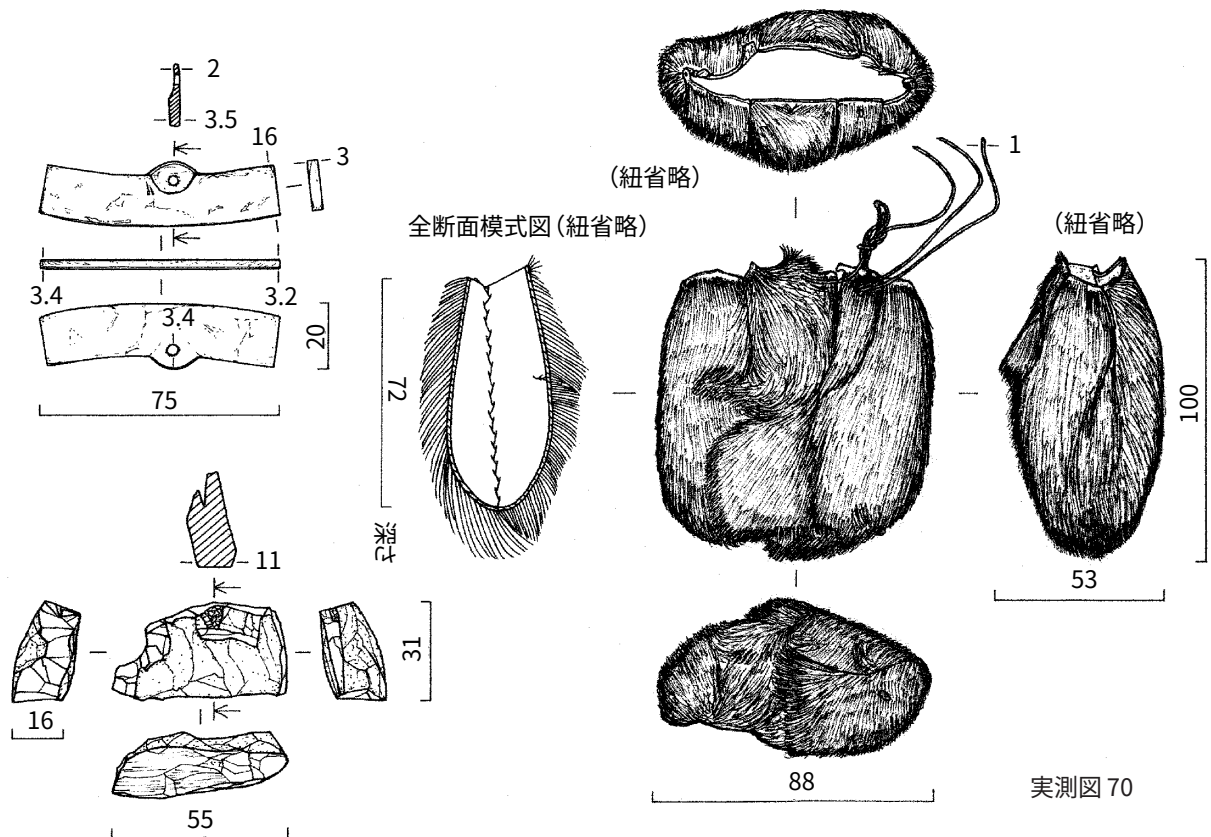


実測図 69

写真番号 145
 実測図番号 69
 分類名 狩猟用具
 資料名 (地方) 詰め替え
 よみ Tsume-kae
 重量 65g
 材料 タケ材
 用途 作った [鉄砲の弾] を [ふるい] にかけて、大小を選び分けた物と思われるが、はっきりとは分らない。
 備考 [弾] が大小混じると飛び方に影響がある。
 旧所有者 鈴木松治 (寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館 (展示室)
 作図者名 松橋睦子



写真番号 145

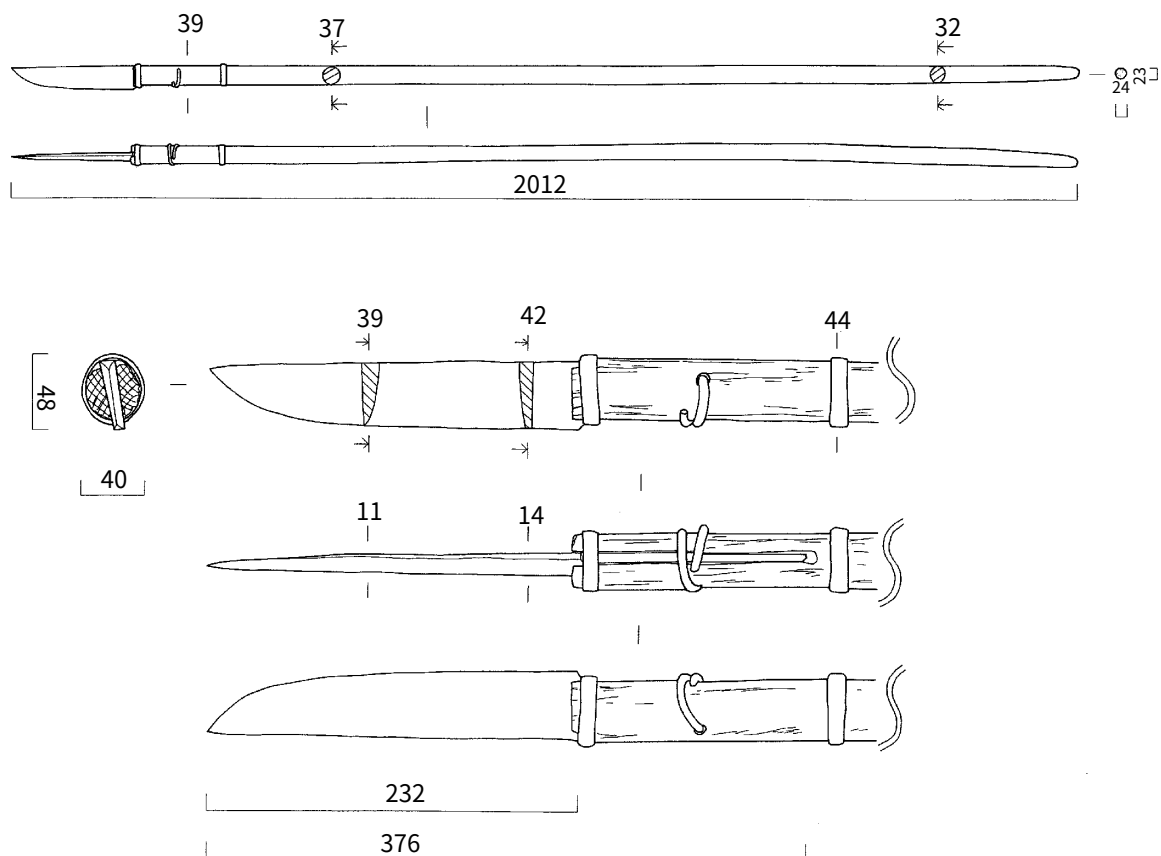


写真番号 146 - 1



写真番号 146 - 2

- 写真番号 146 - 1・146 - 2
 実測図番号 70
 分類名 狩猟用具
 資料名 (地方) 146 - 1 - 左…火打ち石 右…火打ち金 146 - 2…火打ち金入れ
 よみ Hiuchi-ishi・Hiuchi-gane・Hiuchi-gane-ire
 重量 石…35 g 鉄片①…29 g 鉄片②…31 g 皮袋…32 g
 材料 鉄材 クマの毛皮
 用途 [火打ちがね] と [火打ち石] をかちかちとこすって火花を起こす。
 備考 山小屋に泊まった時、[マッチ] がないので [火打ち石] と [火打ちがね] を使った。火種になるものは「フジ炭」や「キリ炭」のように柔らかい木を炭にしたもの。それらを磨り潰して粉にし、付帯している容器に入れておく。火種に [火打ち石] と [火打ちがね] をこすって火花を落とし、火を点ける。しかしその段階では炎は上がっていないので、イタヤの木やヤマウルシの木のように、乾燥しやすい木を [鉈] で削って「鉋くず」のようにしたものゝ火を移す。「がんび (シラカバの木の皮)」があれば一番燃やすのに良い。雨が降った時に火つきがいいのは乾燥したタケ。着火剤になる。[火縄銃] の時代は皮細工製で「ほこじ」を入れるものがあった (松橋時幸談)。
 旧所有者 泉 明博 (打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館 (収蔵庫)
 作図者名 角館さえ



実測図 71



写真番号 147

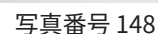
写真番号 147
 実測図番号 71
 分類名 狩猟用具
 資料名（地方） たて（ながさ型）
 よみ Tate(Nagasa-gata)
 重量 1.93 kg

用途 [たて] はクマとの接近戦になった場合、クマが立ち上がって腹を見せる状態になるのでそこを突く。また穴の中で子育てしているクマの傍をマタギが通ったような場合、クマがマタギの存在に気づくとうなり声を出すことがある。マタギの側はそれでクマがいることが分かる。そのような時、クマの穴をのぞき込む事になるが、その際必ず [たて] の穂先を目の高さに構える。穴からクマが出て来た時、[たて] を突きだしたままマタギの方は反射的に顔をぐっと後ろに退く。クマの方は [たて] に突き刺さる。その時クマは目の前にあるものをクマ自身が持って引き込む習性があるため、[たて] の柄も自分で持って引き込んでしまう。それゆえより深く [たて] が突き刺さる事になる。

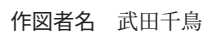
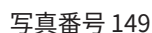
収蔵施設 鈴木米孝家
 作図者名 田崎美紀子



作図者名 武田千鳥



実測図 73



写真番号 150・151・152 ー右・左
実測図番号 74 (写真番号 150)・75 (写真 151)
分類名 狩猟用具
資料名 (地方) わらだ

よみ Warada

重量 150…225 g 151…109.8g 152 ー右…165g 152 ー左…160g

材料 藁材

用途 ウサギを捕まえるための。

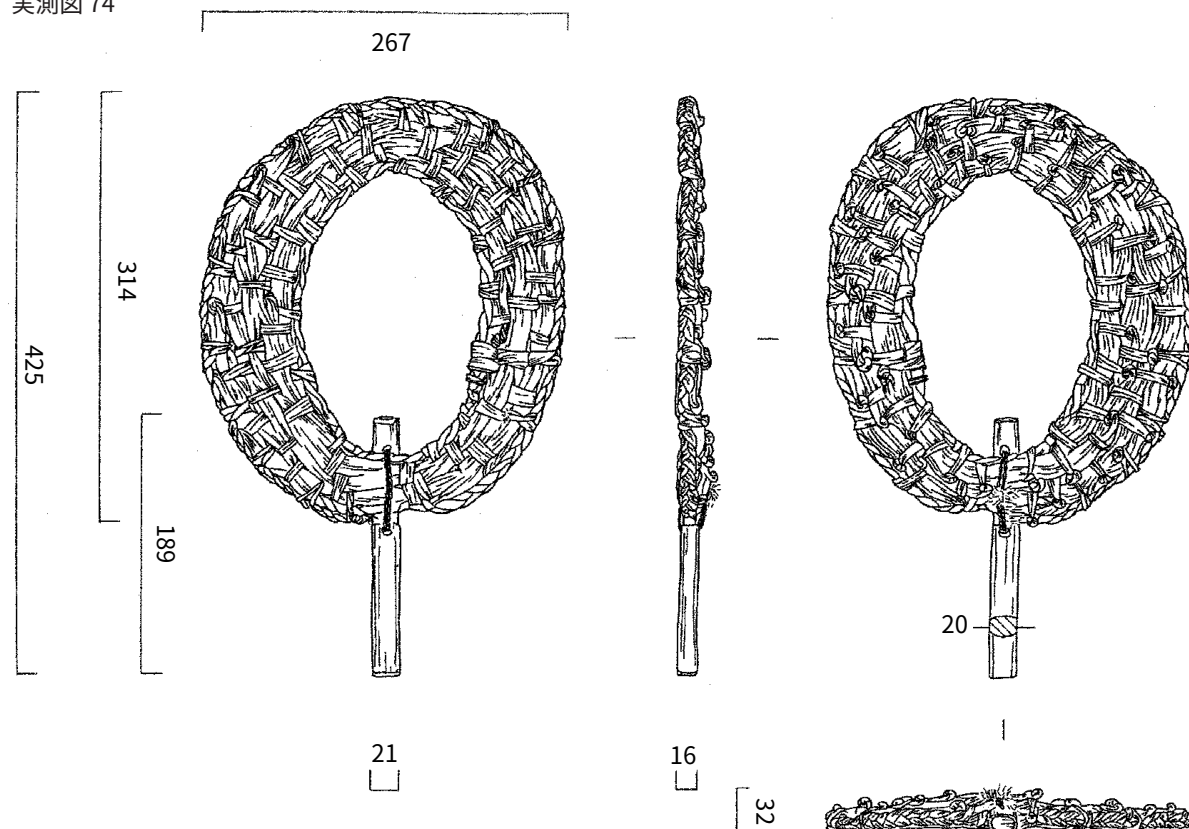
使用方法 ウサギは上からおそう猛禽類のタカのような羽音がした場合は、掘った穴に隠れる習性がある。ウサギをみついたら、20～30m離れた所からその付近に「わらだ」を投げる。投げられた「わらだ」はタカの羽音に似た音を出すので、ウサギがタカと間違えて穴に入り込む。2回くらい「わらだ」を投げると、後ろ足で雪を蹴るようにして巣穴に入り込む。それを見定めてから、マタギが走って行って、その穴をウサギが出られないように雪で閉じてしまう。それからその穴の辺りを「かんじき」でびっしり踏み固めておいて、脇の方から「さって」や「こなぎあえ」で掘り出す。脚を捕まえて引っ張り出したら、耳をもってぶら下げて、頭の付け根に手で一撃を加えて捕る。

旧所有者 鈴木松治 (寄託)

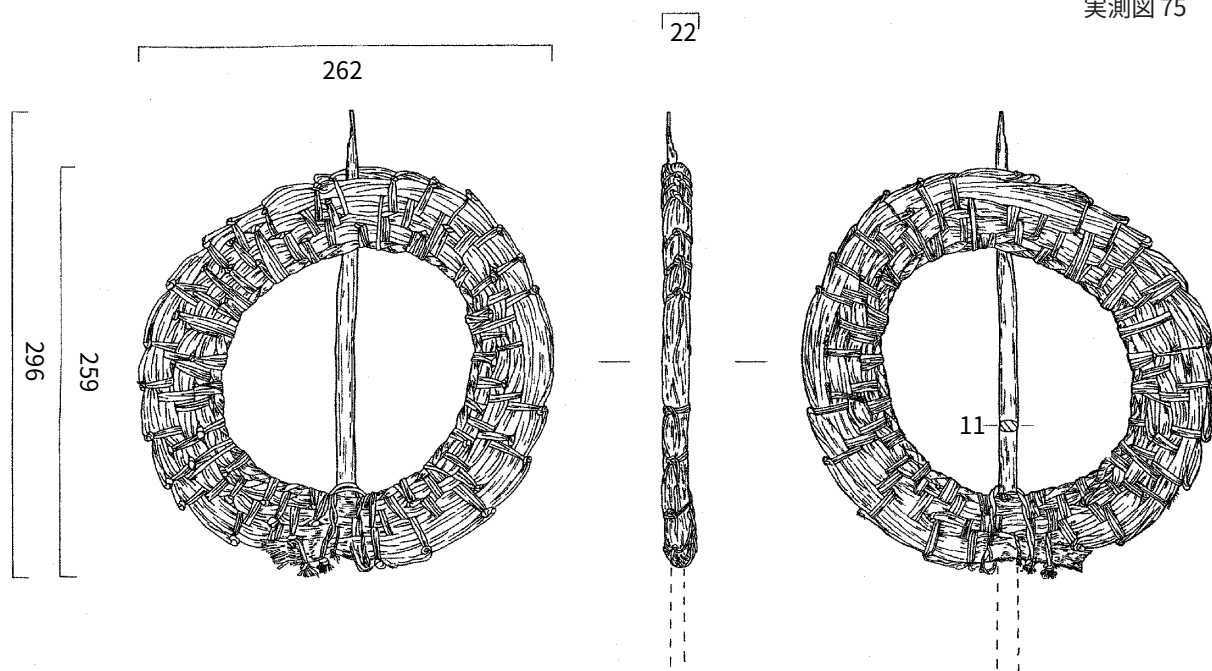
収蔵施設 マタギ資料館 (収蔵庫)

作図者名 74・75…田崎美紀子

実測図 74



写真番号 150



写真番号 151



写真番号 152

信仰・慣習

- 写真番号 153
 分類名 信仰・慣習
 資料名(地方) おこぜ
 よみ Okoze
 重量 80g
 材料 オコゼ(魚)
 材料入手方法 乾燥した状態で手に入れた。どこからかは不明であるが、父松治が準備した。昔映画を撮影した時に、撮影会社が準備した可能性もあるようだ。
 用途 お守り、あるいはパスポートのかわりとも考えられる。
 使用場所 神棚には置かない。座敷の常に見えるような場所で小さな布団の上に置く。「山の神様」は家に置いてない。
 使用方法 自宅に飾る。「山の神様」に捧げるものだが、「またぎ神社」には置かない。
 収納場所 [ながさ] など大事なものが置いてあるところに置く。
 備考 この「おこぜ」は菓をうまく使って仕上がっている。そうでなければ虫が付いて崩れてしまうもの。
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)



写真番号 153

商業活動

- 写真番号 154
 分類名 商業活動
 資料名(地方) 行商鑑札
 よみ Gyōshō-kansatsu
 重量 30g
 材料 木製
 用途 獲物の皮や菓を売る際の許可証。許可証が用紙になる前のもの。
 旧所有者 鈴木松治(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)



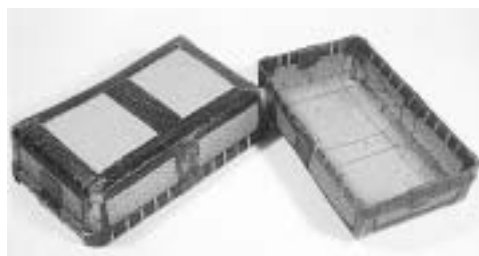
写真番号 154

- 写真番号 155
 分類名 商業活動
 資料名(地方) 行商鑑札(売薬行届済証)
 よみ Gyōshō-kansatsu
 材料 紙製
 旧所有者 泉 明博(打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)

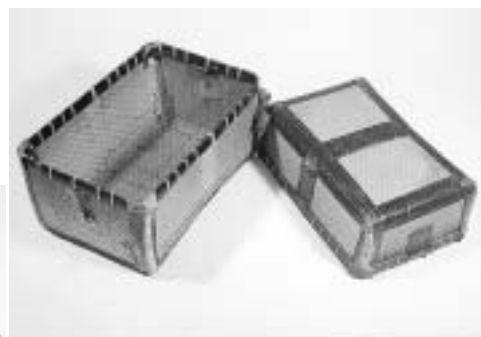


写真番号 155

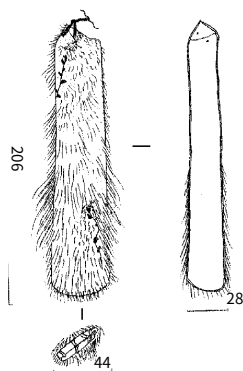
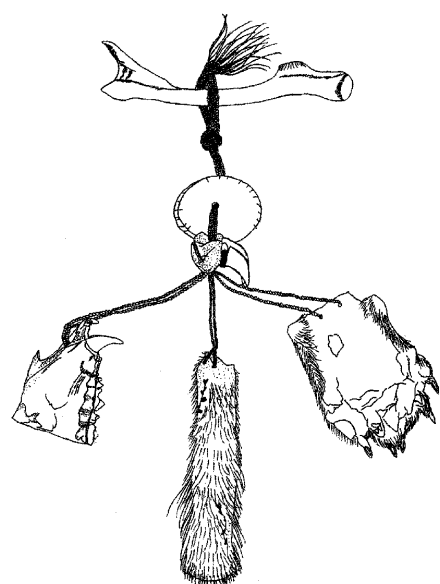
- 写真番号 156・157
 分類名 商業活動
 資料名(地方) 行李
 よみ Kori
 重量 1.87kg
 旧所有者 泉 明博(打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)



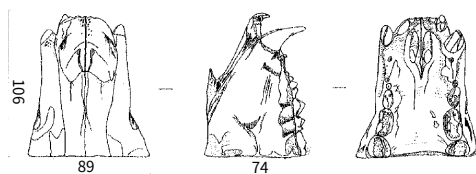
写真番号 156



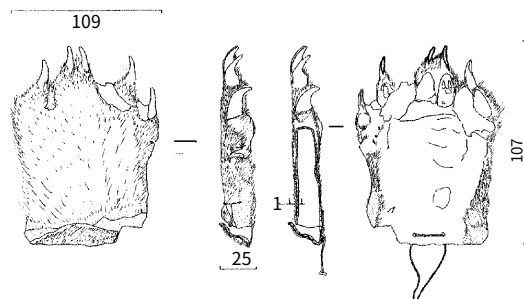
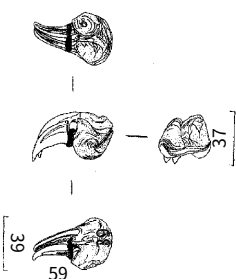
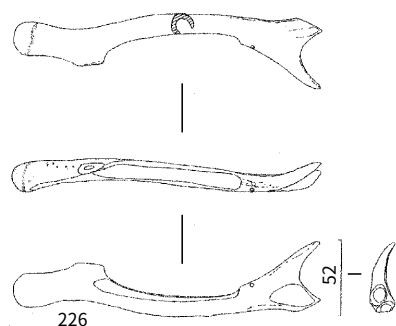
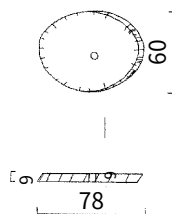
写真番号 157



実測図 76



紐1280



写真番号 158
 実測図番号 76
 分類名 その他
 資料名(地方) 煙草入れ
 よみ Tabako-ire
 重量 360g
 材料 クマの手・骨・皮など
 用途 刻み煙草入れ
 旧所有者 泉謙二郎(寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館(展示室)
 作図者名 武田千鳥



写真番号 158



写真番号 159

写真番号 159
 分類名 その他
 資料名 (地方) 煙草入れ (左)・印籠 (中・右)
 よみ Tabako-ire・In-rô
 旧所有者 泉 明博 (打当地区、寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館 (展示室)

写真番号 160
 分類名 その他
 資料名 (地方) 会津絵図
 よみ Aizu-ezu
 旧所有者 鈴木松治 (寄託)
 収蔵施設 マタギ資料館 (展示室)



写真番号 160